

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ 郷愁を誘うまちづくり

8

2003

特集 | 郷愁を誘うまちづくり

3 巻頭エッセー ● 地域の自立と新たな価値観の創造に向けて

岩手県知事 増田寛也

4 昭和三十年代のまちづくりがブーム

庶民文化研究家 町田 忍

8 岩手県軽米町 埋没していた赤煉瓦建築物の再利用で町おこし——内澤多賀志

10 福島県会津若松市 「大正浪漫調」のまちづくりで衰退に歯止め——庄司 裕

12 山形県高畠町 レトロで街の個性づくりを進める「まほろばの里」——高橋真一

14 東京都 昭和三十年代の買い物を楽しめる空間を演出——倉本久実

16 長野県須坂市 「町並みフェスト」でにぎわい創出——駒津幸男

18 岐阜県 公設民営の「日本昭和村」が四月にオープン——渡部浩幸

20 大阪市 地域性、歴史性の発展的継承と居住地の魅力づくり——鶴丸達也

28 京都府舞鶴市 住民と行政が「ノスタルジックな煉瓦のまち」を実現——森口清滋

30 広島県尾道市 レトロショップ紹介パンフレットで商店街活性化——岡田正弘

32 徳島県脇町 「うだつの町並み」保存を目指したまちづくり——佐藤 淨

34 大分県豊後高田市 「昭和の町」オープンで元気・にぎわいを回復——永松博文

特集



毛越寺のあやめ祭り



子供による延年の舞（花折）

コラム

レギュラー レポート

22 達成感を求め、みんなが踊る 北海道新聞社論説副主幹 本間至能富

27 風格ある都市をめざして 那覇市長 翁長雄志

地方行財政関連施策解説

36 総務省の今年度の地域国際化推進施策 合田克彰

トピックス

39 「ふむふむ」と共感広がるまちづくり基金 為政久雄

地域づくり団体探訪

40 「日本一小さな集落のHP」から情報発信 岐阜県古川町

42 Iターン者との交流から「サーファー米」誕生 鹿児島県西之表市

44 地域だより

アンテナショップめぐり

45 福島県ふるさとコーナー／山梨県東京物産観光センター

46 センター通信



毛越寺の常行堂

グラビア

1 郷愁を誘うまちづくり-I

23 " -II

47 都道府県漫遊●北海道

48 手前みそですが…

●鹿児島県住用村



極楽浄土を表現した毛越寺庭園

●表紙Ⅱ岩手県平泉町
毛越寺の延年の舞
岩手県平泉町の毛越寺で六月二十九日、平安時代から伝わり国の重要無形文化財に指定されている「延年の舞」が披露された。法会のために催される歌舞の一つで、毎年一月二十日に春祈祷の結願として摩多羅神祭に奉納される。
「あやめまつり」でにぎわう同日、「唐拍子」「老女」「花折」の三舞が、特別に公開された。延年とは「長生きをする」意味で、長寿を祈願する。うち「老女」は、百歳の老女のかくしゃくとした舞を受け継いだ僧侶が演じた。また「唐拍子」と「花折」は、子供たちが平安時代の衣装姿で舞い、訪問客の目を引き付けた。
平泉町は、奥州藤原氏が四代にわたって栄華を極めた史都。毛越寺の浄土庭園のほか、中尊寺金色堂、観自在王院跡などの遺跡・史跡をはじめ、三千を越す国宝や重要文化財などが残り、きらびやかな奥州平安文化を今に伝えている。

●文Ⅱ沢 ●カメラⅡ小形又男

郷愁を誘うまちづくり



まちかどレンガ館ライトアップ ● 岩手県軽米町 (p8)



昭和ミニ劇場（昭和参考館・喫茶店）店内 ● 山形県高畠町 (p12)



スバル360を展示 ● 東京都・台場一丁目商店街 (p14)



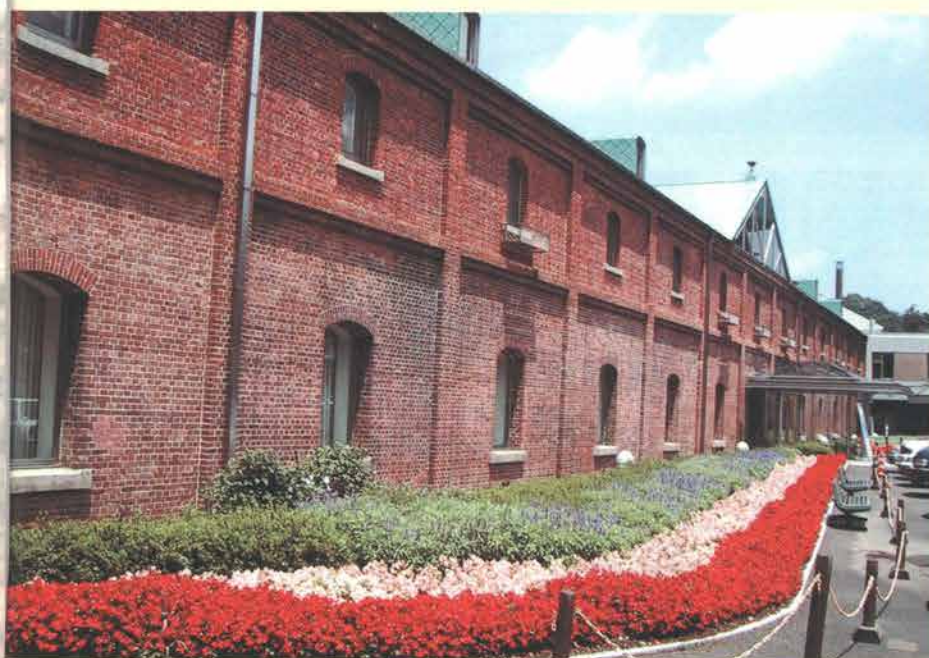
七日町駅カフェとまちなか周遊バス「ハイカラさん」 ● 福島県会津若松市 (p10)



土蔵造りの街並み ● 長野県須坂市 (p16)



旧小学校を移築した「やまびこ学校」 ● 岐阜県 (p18)



赤煉瓦建築物「舞鶴市政記念館」 ● 京都府舞鶴市 (p28)



うだつの街並み ● 徳島県脇町 (p32)



駄菓子屋の夢博物館 ● 大分県豊後高田市 (p34)

固有の街並みを生かす
レトロショップ
● 広島県尾道市
(p30)



祭りちょうちんが似合う街並み ● 大阪市・平野地区 (p20)



岩手県知事
増田寛也

地域の自立と 新たな価値観の創造に向けて

低経済成長時代を迎えた今日、私たちは「経済や社会の成功」の本当の意味を問い直す時期に来ている。

私は、二十世紀における効率性や経済性重視の「画一的な価値観」から脱却し、一人ひとりが「自立」した個人として、創造力を発揮し、それぞれの生きる価値を見いだすことのできるような社会を、実現していくことが重要であると考えている。

それは、それぞれの「個」を基本とし、互いの多様性や違いを認めて共生していく社会の形成であり、その中で「時間、やすらぎ、自然」など、二十世紀の尺度ではともすれば評価されなかったものに光を当て、新しい多様な価値観を創造していくことが大切である。

こうした考え方に立って、私は一昨年から、より人間的に、よりナチュラルに、素顔のままで新世紀を歩き始めましょう、という意味の「がんばらない宣言」を提唱してきた。

さらに、これを具体化する方向の一つとして、グローバルに進む経済社会のスピードのみにとらわれず、自らの地域に本来あるものを大切にした「豊かな時間の過ごし方、生き方」を通じて、一人ひとりや地域にとつての真の豊かさを実現しようとする「スローライフ」、いわて流に言えば「ゆったり、じっくり」の考え方に着目していくことが重要であると考え、取り組んでいる。

岩手では、貴重な自然や歴史・風土、文化など地域資源の再発見や活用を考える「いわて地元学」、

岩手の農山漁村の持つ景観や伝統技術などを活用したグリーン・ツーリズム、農林水産物主産県ならではの生産者と消費者の顔の見える関係、および豊かな食生活に寄与する地産地消運動、あるいは県内外の人が岩手県の自然、歴史や風土、文化、農業などの営みや人情に触れ、「もの」と「こころ」の美しさを体感することにより、単なる観光を超えて、心身を癒やし、健康の維持、回復に役立てることのできるような仕組みである「いわて自然健康院」への取り組みなど、こうした考え方に通じるさまざまな活動が行われている。

県としては、自ら進める各種の基盤整備や産業振興策に加え、本県独自の制度である、県の総合出先機関である地方振興局と管内市町村とが一体となった、地域の振興施策の支援誘導などを目的として創設した地域活性化事業調整費、市町村の自主的な地域づくりを支援するため市町村の裁量的な活用を可能にした市町村総合補助金により、これら地域の取り組みを支援してきた。

今後も、これら地域での活動を支援・推進していくことにしており、これまで、ともすると「全国画一主義」の下に駆逐されてきた、岩手の地域地域に息づいている「ほんもの」の価値の再評価、および活用へとつなげ、「真の豊かさやゆとり」を実感できる地域社会の構築を成し遂げていきたいと考えている。

そして、このような地域づくりを通じて、地域の真の自立を図っていききたいと考えている。



特集

郷愁を誘うまちづくり

昭和三十年代のまちづくりがブーム

「ひと昔前の日本」に強い郷愁感

戦後、それも特に昭和三十年代を中心とする時代が最近、注目されている。昭和三十年代ブーム」とマスコミは紹介しているが、どうやらこの現象は単なる懐古趣味からのブームではなさそう

だ、ということが分かってきた。事実、「昭和三十年代」をテーマとした施設が、全国各地に出現してきたのが約十年ほど前からで、それもここ五年の間に急激に増えている。

実はこの時期、それまで各地にあった、いわば老舗的遊園地の閉園の時期と一致していることに注目したい。これらの遊園地の閉園の原因としては、娯楽の多様化、デイズニーランドのような巨大テーマパークの出現などが考えられるだろう。

次にキーワードとなっている昭和三十年代について考えてみたい。昭和三十年代の時代背景を考えると、戦後の復興期を経て、高度経済成長期に入ろうとした、物質的に恵まれ始めた時代、と言ってよいだろう。すなわち、昭和三十年代初めから同三十九年に開催された東京オリンピック

までのわずか十年に満たない短い期間に、日本は大きく変化したのである。

高度経済成長が変化の推進力に

ちなみに私は昭和二十五年（一九五〇）生まれであり、まさにこの時代、血気多感な少年時代を過ごした。

さてこのわずか十年ほどの短期間の社会の変化は、極端に言えば、それ以前の長い日本の歴史においても、特筆すべき時代と言ってもよいのではない。なぜならば、日本の歴史上でも大きな変化のあった江戸から明治に入った時代を考えてみよう。この時、急激に西洋文化が日本に入ってきたことは、ご存知のことだと思いが、しかしその変化というものが、都市は別として日本全体を考えると、一般庶民の生活はけっして急激には変化せず、相変わらず江戸時代のままの生活が続いていたと考えるのが妥当だろう。事実、大正末生まれの私の両親でさえ、地方でランプの生活体験



庶民文化研究家

町田 忍

があると聞いている。江戸から明治に移る激動期でさえ、一般庶民の生活が目に見えて変化してきただのが分かるまでには、その後を含め数十年というゆっくりとした時間がかかったのであった。

「昭和三十年代はこんな時代」

では庶民にとって、昭和三十年代とは一体、どのような生活であったのだろうか。そこで一つの例として、身近なテレビを挙げてみよう。

日本における一般向けテレビ局の放送は、昭和二十八年（一九五三）にNHKが本放送を開始したことでスタートした。この時のテレビ受像機の価格は、現在の物価水準にすると数千万円となり、庶民にはとても手に届くものではなかった。当時の新聞記事には、「早くもテレビ劇場が出現」と題して、三十円の入場料を取ってテレビを見せる、という商売が現れたことが話題になっている。昭和二十九年二月十九日に行なわれた、NHKと日本テレビによる初のプロレス中継の際は、東京・



新橋や新宿の繁華街にあった街頭テレビの前に、なんと一万人以上の人たちが集まったのである。

「テレビ文化」の幕明け

ところで、わが家にテレビが入ったのは昭和三十三年（一九五八）のある日、バタバタとオート三輪の荷台に載せられてやって来た。早々に茶の間に運ばれ、ゴブラン織りのカーテン様の布カバーが掛けられていた。このころがテレビ普及の第一次ブームであった。なぜならば、次の年の皇太子殿下御成婚を是非、自宅で見たいという庶民の願いがあったためだ。それ以前は、近所のテレビのある家に行き、正座をして見せてもらっていた。もっとも当時の新聞広告によると、昭和三十三年のテレビ受像機の価格は、約六万円から七万円である。テレビが発売された昭和二十八年当時の十分の一以下に安くなったとはいえ、現在で言えば百万円ほどの価格に相当するため、かなりの高



横浜市桜木町「ハイカラ横町」の街頭テレビ（上）と、昭和31年当時の電器店

ばすごいブームだったと言える。

当時登場した白黒テレビ、電気冷蔵庫や電気洗濯機は「三種の神器」と呼ばれ、人々は家電製品を買い、そして家電生活を楽しむために、毎日働いたといってもいい時代であった。わが家を振り返れば、父は決まってテレビの正面に座り、冷蔵庫で冷やしたビールを飲みながら、プロレスや野球観戦をするのが最大の楽しみであった。そんな父を子供だった自分の目で見ると、たいそう偉そうに見えたものである。

都市開発が街を変容

もちろん主婦にとっても、家電の普及は家事労働の軽減の意味合いからしても、大きな変化が突然やってきた時代といえる。しかし、そんな三十年代も後半になると、岩戸景気を中心としてめざましい発展を遂げ、所得倍増計画の発表などを背景として、急激な都市開発が各地に起きた。それ



昭和30年代には町のいたるところにホーロー看板があった

はとりもなおさず近所にあった原っぱが突然姿を消し、モルタル造りの家が軒を並べて建つようになり、釣りを楽しんだ川や運河は埋め立てられて、地下の下水道へと変貌してしまった。

お小遣いの十円玉を握って通った町内の駄菓子屋も一軒、また一軒と姿を消していった。そんな風景を見ながら、子供ながら世の中が確実に大きく変わりつつあることを強く感じたのである。

【昭和三十年代ブームの背景】

さて次に、今なぜ昭和三十年代を中心とする「レトロ時代」とも言うべき時期がブームなのかを考えてみよう。

昭和三十年代後半に本格化した都市開発で、町の風景が大きく変わってきたことは既に述べた通りである。この時代、変わったのは何も町の風景だけではない。そのような観点で考えるならば、昭和三十九年という年が重要なポイントとなった。例えばこの年四月には海外旅行が自由化された。翌四十年に登場した「JALパック」でさえ、当時ハワイ九日間が三十七万八千円で、現在の物価水準にすると、実際の料金はその四・五倍に相当する。また、東京―大阪間の新幹線開通や東京オリンピック開催も生活や社会の価値観に大きな変化を及ぼした。

スーパー進出が小売店を駆逐

同時に時代はもう少し下るが、一九七〇年ごろ



再現された昭和30年代の茶の間（埼玉県行田市「昭和の懐かし館」）

から、外資系のファーストフード、それにコンビニエンスストアやファミリーレストランなどが登場し、それまでとは違った大手資本による店舗が続々と各地に出現したのである。それまでの商店街の小売店による対面販売からセルフサービスへと販売方法が変化した。その最大の特徴は、チェーン店はどこへ行っても同じ味だが、営業時間が長いことだった。一方、地方の商店街の中には、巨大スーパーの進出によって閉店に追い込まれるケースが目立ち、街並みが大きく変容し始めたのがこの頃のことであった。

同様のことがデパートの変化にも当てはまる。当時、都市の顔だった有名デパートは、今となっ

ては外国ブランド品を販売する単なるテナントショップと化し、子供の楽しみだった屋上の遊園地も、現在は全く活気がなくなってしまった。

今日に至りデパートで元氣があるのは、たまに開催される全国駅弁の販売催事と若い女性から「デバ地下」と称される地下の食料品売り場のみとなってしまう。都市文化の象徴的存在だったデパート、すなわち百貨店の使命は、既に終わってしまったのだろうかと思ふほどだ。

「デバ地下」がにぎわいを存続

そんなデパートに私が注目しているのは、「デバ地下」と呼ばれる地下の食料品売り場である。どのデパートの地下へ行ってもかなりの客でにぎわっており、活気もある。なぜだろう。その答えは、まず対面販売にあると考える。そして小さいながらも数多くの店が入っている。試食のできる店が多いことも関係しているが、とにかく大勢の客で常にごった返し、にぎわいを維持しているのである。

実はこのような風景は、昭和三十年代にはごく普通に、どの町でも見ることができた。昭和三十年代ブームの理由のヒントが、実は「デバ地下」にあるということになる。

都市再開発ブームは一過性か

ところで近年、東京を例に挙げるならば、東京駅前の新装丸ビル、汐留地区一帯、そして六本木地区といったように、新しい都市再開発ゾーンが相次いで出現している。この種の再開発地区がま

だまだほかにもあるというから、まさに乱立と言ったところだ。何か所かに行ってはみたが、客は多いけれど買い物をする人は少ない感がある。こんな不景気な時代に、これほどまでぜいたくな建物・施設を造っても大丈夫かと、余計な心配もしたくなる。

先日会ったある大学の社会学部の教授が言うには、「ある種の一過性のブームでしかないのでは」とのことだ。あと何年かすると、どこも人出はかなり減るだろうと分析している。街が無機質で、未来都市のようなビル群に、人々は次第に消化不良を起こしているのかも知れない。

すなわち、いくら建て物が立派で近代的になっても、人間というものの、人と人とのコミュニケーションとか、木や土といった自然に対する思い入れのあるものが必要不可欠になるのではないだろうか。街が近代化すればするほど、逆の方向のもの、昔あった懐かしい街並みが必要とされてくる傾向が強まっていることが、昭和三十年代が注目されている要因と思われる。

「昭和時代とまちづくり」

最後に、昭和という時代とまちづくりに関して述べてみたい。

現在、昭和を中心とする懐かしい時代をテーマとした博物館、資料館、テーマパーク、街並みの数は、全国で百を越えるほどあるだろう。

これらは、行政や民間、個人などが運営するものと各種あり、その内容もそれぞれ個性的である。東京の小金井にある江戸東京たてもん園は、「千



と千尋の神隠し」にも登場する街並みのモデルとなった、“戦前の昭和”が移築された商店などが並び、保存されており、正面には立派ながら昔の銭湯もある。一方、東京のお台場のショッピングセンター内に再現された昭和三十年代の商店街「台場二丁目商店街」には、射的場あり、紙芝居ありと、参加イベントが充実している。横浜桜木町のワールドポーターズ内の「ハイカラ横丁」には、小さな畳の部屋があり、テレビ、ちゃぶ台が置いてあるなど、懐かしい空間を再現している。ちなみに、これらはすべて私が監修したり、資料提供をしたのであるが、再現の作業は実に楽しかった。

「昭和時代」が各地に再現

それはともかく、この種の昭和時代の空間はいくつかに分類できる。まずは、資料館的価値を持たせるもので、これは行政に多い。ただ、博物館的要素や法律の関係上、制約が多いのが欠点であり、例えば前出の江戸東京たてもの園の場合だと、銭湯の煙突が高いので建てられず、湯を入れて客に入浴してもらうことはできない。半面、資料的には本物も多く見応えは十分ある。

これが民間だと、営利目的となるので、客の参加型、物販スペースが中心となってくる。その他、個人や小規模なものも多い。これは個人宅や個人店舗の一角のスペースに所有者のコレクション類を陳列公開しているものである。

商店街ごと「レトロ化」の波

最近多くなってきたのは、商店街ごとトータル

に、昭和レトロをコンセプトにして、まちづくりに応用しようとする動きである。これは一九九四年にオープンし、昭和レトロブームの発端となった「新横浜ラーメン博物館」を、人工的な環境演出型集客施設とするならば、地域活性化型集客施設ということになる。

例えば大分県豊後高田市の「昭和の町」、山形県高畠町の商店街などが挙げられる。これら商店街の特徴は、既存のものを最大限に活用している点にある。

ともすれば店舗という性格上、近代的な装いとしがちだが、不景気な昨今、そうもいかないのも事実。そこを逆手に取って地域の活性化に応用（店舗を逆改装）しようというものである。時代的にもこれが江戸時代、明治時代となると、古過ぎて残っているものも少ないが、こと昭和になると、現在でも結構、各地に多く残っている。

若者の目が「再発見」の原動力

これまで倉庫などに眠っていた生活用品・用具や売れ残り商品などを引っ張り出してくるだけで、結構懐かしさ、今となっては貴重品扱いとなる場合も多い。ただこれらの対象物も、昔の人（高齢者）から見れば、何も珍らしくも何ともないものと思われがちのことが多い。むしろ若者に見てもらった方が、異なった目で見ることができ、



山形県高畠町の「昭和ミニ劇場」

思わぬ発見がある。もし、地域活性化の利用のために何か発見しようと思ったら、その中には非若者を参画させてみてはいかがだろうか。

そして生活用品・用具などの品物が出てきた場合は、なるべくそれを生きた形、すなわちどのように使用されていたか、どんなところに置かれていたかを再現するべきである。関係ない台に単に陳列するだけでは、その物を充分に活用していないことになる。できればその使用法や説明を書いておくのも良いだろう。また、体験として触れてもらうことが必要な場合もある。

総じて言えることは、何も気張ったことをする必要はないのである。

昭和三十年代の生活の中にヒント

最後に、ここにしかない何かを見つけて欲しい。この店にしかないもの、この街にしかないもの、それはきっとあるはずである。それとコミュニケーションのできる雰囲気づくりがあれば、充分である。

これからの混んとした時代のまちづくりに必要なものは、何も新しい高層ビルだけが必要なのではない。もっと必要なものがあるのではなからうか。そんなヒントが私は昭和三十年代の生活の中に、埋もれているような気がしてならないのである。



埋没していた赤煉瓦建築物の再利用で町おこし

豪雨災害を機に「にぎわい復活」に立ち上がる



軽米らしさ探偵団

● 内澤多賀志

平成十一年十一月二十八日の豪雨災害から約十カ月、軽米町がなんとなく活気をなくし始めたころ、災害復旧工事の音が忙しそうに響く中で、災害に加え、不景気で町がますます元気がなくなる

と考え、何とかしようとして開催されたのが同町商工会活性化委員会だった。その委員会に招いたのが伊山建築士で、その伊山さんの発言が煉瓦建築物保存の発端となった。

「軽米には煉瓦の建物が意外と多いんですね」

「山内地区の小学校、大町の倉庫も煉瓦だし、円子地区のサイロのある所は牧歌的でいい風景ですよ」

● 生活の中に溶け込み忘れられていた煉瓦

私もこの町には煉瓦の建物があるとは思っていたが、それほど注意深く見ていたわけではなく、日常の景色の中に溶け込んで、いや、埋没していたのか、指摘されるまでは毎日



地元学ワークショップ作業

通っている道路端の煉瓦住宅でさえ、即座に思い浮かばなかったほどだった。

軽米ににぎわいと元氣を取り戻したい、交流人口を少しでも増やして町の刺激剤にしたい、との結論に達した私たちは、まず第一に軽米の特徴的な有形物、建造物は何であるか、軽米らしい建物を探し出すワークショップを始めた。軽米にはかやぶきの大きな家がある。また、木造仕舞多屋風の家もある。

煉瓦の建物が軽米町の特徴的な建物であるのか

どうかで、異論・疑問が噴出する中、「かやぶきの家、木造仕舞多屋風はほかの町にもある。早い話、隣町にも存在する。煉瓦という欧風ハイカラ建築の建物が、岩手県北の田舎町にあるということは非常に珍しいのではないか」という意見があった。

東京、横浜、函館、小樽など、

大都会とか港町には確かに有名な煉瓦建造物があり、映画やテレビでも見たことがあるし、観光旅行で訪れた所もある。不思議と言えば不思議、そこに子供のころからあったから、何の疑問も抱かずに生活していたが、この田舎町に煉瓦建築のミスマッチ。これは調べてみる必要があるだろうとなり、私たちはさっそく、現地調査に入った。

後に聞いたことだが、煉瓦活用ではやはり札幌



まちづくり講習会現地視察

物があるなんて信じられない」とさえ、言われた。

● 二十カ所以上の昭和時代建築物を確認

それはさておき、調査の結果、軽米町には二十カ所以上に及ぶ赤煉瓦建築物があった。ほかの国内の煉瓦建築物は西欧モダンにあこがれてか、明治時代から大正時代に造られたものが大部分だが、軽米ではなぜか昭和二十五、二十六年から昭和三十五、三十六年の約十年間に集中して造られたもので、それ以後は一切存在しない。

それも軽米の粘土で、軽米の人が、軽米の工場で焼き、軽米に建てた。軽米赤煉瓦建築物は、町の中で一話完結していたのであった。これが調査



結果の際立った特徴であった。

平成十三年には日本赤煉瓦番付という日本赤煉瓦連盟で出しているランキング表にも載せてもらった。前頭十五枚目の幕尻の目立つ所だ。理由は、「他の煉瓦の建物はほとんどが明治、大正時代に建てられているのに、軽米のものは昭和二十年代後半から約十年間で建てられた。まるで周回後れのトップランナーみたいである。さらにその存在価値に町の人たちが気が付いていないことが面白い」という理由だそう。

元醤油工場をまちかど博物館に保存

地元学のワークショップの最中に、はんらんした雪谷川の河川改修により、古くからの煉瓦住宅が取り壊されることになった。移転保存を呼び掛けたが、結局力及ばず、壊されてしまった。さらにもう一棟、元醤油工場も撤去解体するという話があり、私たちはその土地、建物を賃借し、危うく二棟目は難を免れた。

その一室をまちかど煉瓦博物館として、軽米煉瓦の資料を探し集め、保存活用している。学校、歯科医院、倉庫、書庫など現在使われている所はいいものの、使われていない建物に少しづつ生命を吹き込み、忘れられていた軽米の郷愁を復活させる考えだ。また、赤煉瓦酒蔵をCDコンサート、ジャズ生バンドコンサート会場に、アワや山菜の乾燥庫をサークル会場にと、利用範囲の拡大を試みている。

新しい町営住宅の建設の時も、「軽米町の特徴的な建築様式とか、木材とか、シンボルのなもの

があれば用いたいと呼び掛けたところ、当町は特にないと返答だったので、普通に建ててしまっただ」という県の建築担当官の話を後で聞き、私たちの活動の立ち上がりの遅さと、まだ地元学の名前も知らず、意識の目覚めの悪さを悔やんだ。これからは「何もない軽米町」と絶対に言われないようにしよう、自分たちの住んでいる町のことをよく知っておこうと思った。

橋脚や公園などに軽米煉瓦を使用

豪雨で氾濫した雪谷川中部の五橋が河川改修工事により架け直されるとの情報があり、今度は後れを取らないようにと、架橋の協議会、説明会に積極的に参加した。もちろん、橋を軽米煉瓦で造ってほしいということだ。

予算の問題や、橋脚は水の中であるということから安全性、強度など、さまざまな面から協議した結果、三橋の親柱を煉瓦で整備することが可能という回答を頂き、大いに喜んだ。また、水防公園の花壇、トイレ、掲示板などを煉瓦で整備した。そのほか、秋ごろまでには雪谷川河畔のポケットパークにも、煉瓦で花壇やモニュメントを造ることにになり、工事で埋もれるかと思っていた川に注ぐ湧水の周辺も、揚水場の外壁も煉瓦仕様、という具合に、町中心部の雪谷川復旧とともに失われた軽米煉瓦もよみがえってきた。



煉瓦造りの親柱

現在、私たちの活動に賛同してくれる人が自宅の花壇や垣根、塀などを煉瓦で造ってくれている。その人数は五、六人とまだまだ少数だが、何分お金のかかることなので、個人には強く働きかけられないのが実情だ。

特産品・工芸品の製造販売にも利用へ

私たちの活動は緒に就いたばかりだ。これからの課題としては、地元の人たちにもっと軽米煉瓦と私たちの活動を理解してもらうこと、使われていない煉瓦建造物をもっと活用することと考えている。現時点の計画では、煉瓦倉庫で地元の雑穀の特産品、工芸品の製造販売を目指しており、そのため、地元産の雑穀を使った食品の開発を行っている。

先人が残した煉瓦は、郡部の村にまで広がっており、軽米煉瓦建造群と呼ばれている。

町中心部のものは小さな建物が多く、再開発には困難を伴うが、私たちの世代で認識を新たにし、次の世代に橋渡しをしたい。豪雨災害を機に、町の歴史を見直し、軽米らしさを探し出し、軽米らしさを製造し、残していきたいと思っている。

活動していても思うことは、田舎の生活は都会と違って、一人ひとりの粒子が大きい、群衆に埋没しない、自分の仕事、考え方がダイレクトに地域の働きに結びつく。だから、あきらめないで、行動し発信していくこと、それが小さな町に住む者たちの醍醐味であると思う。



「大正浪漫調」のまちづくりで衰退に歯止め

——城下町らしい特色ある商店街を再生



七日町通りまちなみ協議会
副会長 ● 庄司 裕

十年前の平成五年夏、私は親友の渋川恵男君

(現・七日町通りまちなみ協議会会長)と彼の二男で当時大学生だった義満君の三人で、七日町通りの建物調査を行った。汗だくになりながら、住宅地図に古い蔵や洋館、木造店舗などを色分けして塗りつぶす作業だった。約八百メートルの通りを二往復した。

渋川君は当時、七日町通りの西のはずれで郷土料理と旅館を営む「渋川問屋」の社長だ。私と高校の同級生である。通りの建物調査を思い立ったのは、その年の六月に埼玉県川越市で開催された全国町並みゼミに参加したのがきっかけだった。二人とも川越市を訪ねるのは初めてだった。

「川越の蔵の街並みはすごい。会津若松市にもこんな町並みがあるといいな」
渋川君がため息をついた。

「待てよ、七日町通りにも古い蔵や洋



七日町駅にSLがやってくると、駅前の阿弥陀寺本堂で会津観光キャンペーンクルーによる白虎隊の踊りで歓迎する

館などが残っているんじゃないかな」

七日町のまちづくりのスタートだった。

● 郊外店への流出で消えていく商店街

会津若松市は人口十二万七千人の城下町である。鶴ヶ城や白虎隊が自刃した飯盛山などの観光

資源に恵まれ、年間約二百七十万人の観光客が訪れる。七日町通りは街の中心である大町四ツ角から西に延びる商店街で、昭和三十年代ごろまでは二つの映画館を構える会津一の繁華街だった。

しかし、バイパスの開通など道路事情の変化により、消費者は中心市街地から郊外店へ

と流れて行った。七日町通りも空き店舗が目立つようになった。中心市街地を東西に貫く幹線道路のために、車の通行量が多いものの、買物客はめっきり減り、ついには商店会も解散し、市内の商店街連合会からの脱退に追い込まれた。私たちが建物の調査をしたのは、まさに七日町の商店街が衰退した時だった。

● 昔の風情に戻す「最後の挑戦」

会津若松市の市街地は、明治の戊辰戦争で大部分が戦火に遭い、江戸時代の建物は数えるほどしか残っていない。それでも七日町通りには大正、昭和初期の蔵や洋館、木造商家など、歴史的な建造物が点在しているのが分かった。ただ、これらの建物のほとんどが外観を新建材で覆ったり、窓枠をアルミサッシに変え、趣きを失ってしまっていたのである。

私たちはそうした外観を昔の風情に戻し、歴史的な建物を保存しながら、城下町らしい特色のある商店街の再生を目指そうと思った。調査の後、古い建物を所有している何人かの商店主と個別に面談して、理解を求める活動を始めた。ある日旧商店会の会合に呼ばれた。途中から活動に加わった目黒章三郎君(現副会長)も一緒だった。

「君たち何かやっているようだけど、話を聞かせてくれないか」

私たちはこれからの七日町のまちづくりの構想を熱っぽく語った。しかし、反応はなかった。

「我々商店会としても、都はるみを呼んで歌謡ショーをやったり、大売り出しもやってきたが、



空き病院を修景したテナントミックスの「アイバッセ」

時代の流れには逆らえないよ」

異口同音にやるだけ無駄だよ、と言ったニュアンスだった。そんな雰囲気の話し合いだったが、ある商店主がポツリと発言した。

「我々はもう年だから無理だけど、息子たちに話してみよう。まあ、これが七日町の最後の挑戦だべな」。

行政と報道機関の支援が後押し

翌年の平成六年三月、小野隆市氏（現最高顧問）を会長に七日町通りまちなみ協議会が発足した。会員二十二人。七日町のまちづくりは商店街活性化だけでなく、地域コミュニティの再構築という

意味もあって、町内会の区長に顧問になってもらった。

私たちの活動に関心を持った地元紙福島民報の報道部長が、紙面に十回連載で七日町の話題を取り上げてくれた。次第にまちづくりの機運が盛り上がった。ある米屋さんが店構えを修景しながら茶屋に業態を変えた。また地元の酒造会社があき店舗を洋館風の建物に改修して、ミニ資料館と土産店を開いた。

行政の支援も大きかった。市ではまちなみ観光や商店街活性化に力を入れ始め、さまざまな補助制度をつくってくれた。県と市が廃業したガソリンスタンド跡地を、ステージ付きの市民広場に整備した。

ソフト事業にも力を入れてにぎわい回復

現在では会員数も九十人を超え、三十八軒の店舗や民家が七日町通りの景観に合った建物に改修し、十五軒の空き店舗が埋まった。街並み景観というハード面からまちづくりに取り組んできた私たちだったが、商店街のにぎわいと地域コミュニティの構築という点から、ソフト事業にも力を入れた。



毎年10月中旬に七日町市民広場で行う最大のイベント「七日町パラダイス」

六年前から毎年十月に骨董市やジャズライブ、きものしゃなりウオーク、バザールなどを取り入れた「七日町パラダイス」を開催している。また盆踊りを十四年ぶりに復活させたり、市民広場で野外映画を上映したりもした。昨年七月に無人駅だったJR七日町駅が県、市、JR東日本の支援で、大正浪漫調の洋館に改修され、アンテナショップ「駅カフェ」として開店した。あいづふるさと市町村圏協議会が運営している。

十年前は通学途中の高校生以外、歩く人がほとんどいなかった七日町通りだったが、昨年の歩行者調査によると、平日で一日三千五百五人、休日で二千二十一人を数えた。前年の約一・八倍である。さらに、まちなかを散策する旅行者も目立つようになった。

終わりのないまちづくりに挑戦

七日町のまちづくりは、まだ発展途上にある。将来は七日町周辺の定住人口を増やすことが必要だし、お年寄りが安心して買物できる商店街づくりも課題だ。歩道の整備や無電柱化も進めなくてはならない。

まちづくりで一番大切なことは「人」である。情熱を持って取り組む人が五人いれば何とかなる。一昨年に女性部会ができ、今年の六月には青年部会が発足した。女性と若者の感性が加わった。七日町のまちづくりはこれからだ。



レトロで街の個性づくりを進める 「まほろばの里」

—昭和三十年代を体験できる中央通り商店街



山形県高畠町企画課
まちづくり推進室長

● 高橋 健一

高畠町は山形県の南東部に位置し、奥羽の美しい山並みに囲まれた盆地には肥沃な耕土が開け、四季折々の多彩な風景が展開される実り豊かな自然環境を持つ。「まほろばの里たかはた」の愛称で親しまれ、人口約二万七千人の農業、商業、工業一体の町づくりを展開している。

J・R山形新幹線「つばさ」で東京から二時間二〇分の距離にあり、温泉のある高畠駅は「太陽館」の愛称で親しまれ、多くの旅行者や町内外の温泉愛好者でにぎわっている。駅構内には、現代日本児童文学の先駆者である、高畠町名誉町民の浜田広介が描いた「泣いた赤おに」の、赤鬼と青鬼の像が来訪者を迎えてくれる。駅のレンタサイクルで駅前を走る「まほろばの緑道（大規模自転車道路）」を北へ約一・五キロ行くと、「愛と善意の思いやりの心を大切にする童話の里」の拠点である浜田広介記念館、生家、ひろすけホールが来訪者を温かく迎え入れてくれる。

さて、高畠町は古くから青年団活動、J・C活動

などが活発で、生活の質向上のため、それぞれの組織が個性的、独創的な考えを持ち活動が続いている。農業者で組織する共生塾、屋代村塾は、有機農業愛好者が「まほろばの里農学校」や都市と農村の交流活動を行い、イターン者の増加など、地域の活性化に努めている。

また、高畠町の中心部に位置する高畠中央通り協同組合（村上四郎理事長）加盟店は、近隣への郊外型大型店舗の進出で、商店街の弱体化が進んだため、にぎわいが最盛期だった昭和三十年代を取り戻すさまざまな活動を実践。中央通り商店街の個性を打ち出す「昭和ミニ資料館」を各個店に開設するなど、昭和三十年代の歴史を体験できるまちづくり活動を展開している。

商店街挙げての魅力あるまちづくり

高畠町の中央通り商店街は、町の中心部に位置し、J・R高畠駅（旧糠野目駅）から車で十分、旧高畠駅から東に一・二キロの通りで、沿線には庶



昭和式号館の手づくり看板

々くれる。見渡せばあそこは何屋と一目で分かる、すばらしいアイデアだ。

また、各所にある神社や寺は心と体を静めてくれる。厳島神社や高德寺、妙国寺などの深い歴史を感じながら、境内でちよつと一休み。また、ごんぼの実祭りで有名な観音様、大わらじが奉納され一月にはわらじみこしが行われるお大目様と、高畠を代表する祭りで通りはにぎわう。伝統文化の発祥の地がここにある。

この通りは、平成四年の「べにばな国体」を契機に、中央通り花いっぱい運動から「花の散歩道」づくり、中央通りの個性づくりから昭和三十年代にこだわる昭和ミニ資料館の開設、そして「旧高畠駅舎の活用を考えるフォーラム」の開催など、中央通り商店街の経営者と地域住民はもとより、町内外の多くの人と協働で、魅力あるまちづくり、商店街づくりを着実に築き上げている。

平成四年六月に中央通り商店街連合振興会を設立し、国体（高畠町は軟式野球会場）歓迎旗百五十四本、プランター六百個を地域住民と一体とな

民の日常生活に密着した商店が立ち並ぶ。その軒先には商店街がデザイン・製作した木製の看板がぶらさがっている。漬物屋なら大根、タバコ屋は煙管と、私たちの目を楽しませ



昭和ミニ資料館を同月に四館オープンした。規模的には、会員の店の一部に展示してもらったり、空き倉庫を利用したりと、まさに手作りのミニ資料館である。これがまた大きな反響を呼び、各新聞で大きく報道された。特に、平成九年四月末にNHKテレビ「ふれあい通り」で全国放送された時は、遠くからの観光客が増えてきた中、全国の商工会や行政関係者も「商店街活性化のシン



昭和号館では古い時計、カメラなどを展示

央通り花と緑の会を設立、老人会や子供会などと協働で中央通りの環境美化活動を行った。

平成七年七月、中小商業活性化助成事業「中央通り集客力向上事業（昭和ぐらふてい）」を三日間開催し、テレビや新聞で広く報道された。また、「昭和の懐かしいもの」を公民館に展示したところ、大変好評で、このまま単発のイベントで終わらせるのはもったいないとなり、翌八年、物置などに眠っている「昭和時代のもの」を町の広報とチラシで広く募集した結果、予想を上回る品々が集まった。これに伴い、応募品を展示する常設の昭和ミニ資料館を同月に四館オープンした。

り、中央通りに設置した。この時、ガイドレール、街路灯の塗装を統一、ガイドレールの一部を撤去し、その下にプランターを置いた。その後、花いっぱい運動を継続するため、翌五年三月に高島町中

トに」と多数訪れた。また、各地から昭和時代の資料提供が増えたのを受け、資料館づくりの賛同者も増え、平成九年に五館、翌十年に四館と、現在は十八館が開館した。

資料館の内容は、一号館は古時計、カメラなど、三号館は映画のポスター、五号館は六畳の茶の間と生活用品、六号館はマンガ本、七号館は「昭和小学校中央通り分校」の教室を再現し、当時の学用品などを展示。それぞれの資料館には、来訪者との交流の場が設けてある。

クラシックカー全国大会も開催

また、平成十年から町交通安全町民大会と共催の「クラシックカー・レビュー・イン高島」を二年ごとに開催。昨年は約八十台のクラシックカーが全国から集まり、それを一目見ようと町内外から大勢のカーマニアが集まり、大盛況に終わった。

商店街の生き残りを賭けるひたむきな姿は、身近な商店街の空洞化に心を痛める視聴者に明るい話題を提供したことが評価され、同十一年三月に「NHK東北ふるさと賞」、また、YBCテレビの「ユニークまちおこし大賞」を受賞した。

その後、同十二年五月には、昭和土曜市を発展させた「高島ふれあい市」が発足、消費者や観光客との交流を図りながら中央通り商店街のにぎわい創出のため、地元商店と農家で構成する「高島ふれあい市の会」を組織・運営し、有機栽培の野菜や地元が作った「高

島ブランド」の商品を販売している。訪れた客たちは、露天の関係者と会話をしながら面白い物を楽しんでいる。

この年は一店逸品運動研修会をスタート、翌年に一店逸品発表会を開催した。十二年十月には、まほろばの里たかはたの各商店と一緒に、一店逸品フェアを開いた。この活動は町商工会が開発したIT（情報技術）による町づくり事業として、「高島望遠郷」で広く全国に情報を発信している。

旧高島駅舎の活用を起爆剤に

また、旧高島駅舎の活用を考えるフォーラムは、大正十一年から昭和四十九年まで、町民の足として活躍した高島鉄道を中心に位置した旧高島駅舎



旧高島駅舎

（高島石を使用した歴史的な建造物。平成八年まで高島町森林組合事務所として使用したが、現在は閉鎖）の今後の活用アイデアを広く募集するため発足。活用企画コンペを通じて町内外から七十点に上る応募があり、入賞作品を基に活用方法を町に提言し、町民および関係団体と一緒に、旧高島駅舎の活用を起爆剤とした、地域づくりの輪を広げている。

今後魅力あるまちづくり、商店街づくりが展開されることを期待するとともに、官民「協働」のまほろばの里づくりに、さらに努めていきたいと考えている。



昭和三十年代の買い物を楽しめる空間を演出

——最も活気あつた時期を再現してにぎわい復活



デックス東京ビーチ営業企画チーム
販売促進担当 ● 倉本久実

デックス東京ビーチ（東京都・港区）は一九九六年七月に開業、二〇〇〇年十二月に増床した。そして、街が変わりつつある中で、客層の変化を取り込む新たなフロアとして、〇二年十月二十六日、フロアリニューアルを行い、「台場一丁目商店街」みんなで買い物」を開業した。

新タイプのショッピングゾーン目指す

臨海副都心という新しい街に「商店街」というフロアネーミングをした理由は、単なる懐古趣味からだけではなく、新しい街（ショッピングモール）でありながら、「活気ある雰囲気」、「お客様との交流」、「商店街が一体となった催し物の開催」など、商店街ならではの強みを生かした、新しいタイプのショッピングゾーンを目指したためである。

また、サブタイトルの「みんなで買い物」は、かつてあこがれのものを手に入れる「買い物」がレジャーであった昭和三十年代を懐かしむ



ビクター犬や丸い郵便ポストなどを配置したメインストリート

とともに、アミューズメント施設を中心とする観光地・お台場にあつて、レジャーとしての『買い物』を再発見、再定義しようというものである。商店街の環境は、昭和三十年代をコンセプトに、来訪者がみんなで買い物を楽しめる参加型の空間を演出している。

戦後復興期から高度経済成長期に至る、最も活



当時の縁側を再現したイベントスペース

気あつた時期・昭和三十年代をコンセプトに設定した。電化製品が普及し始め、長屋から団地の生活に移行するなど、日々の生活から娯楽やファッションまでに「洋」のスタイルが浸透し始めた時代。また、それまで庶民には手の届かなかった、あこがれの白黒テレビや「スバル360」などの自動車を実手に入れることが可能になった時代。モダンな暮らし・モノにあこがれ、買い物そのものがレジャーであった時代には、「家族そろって：」「近所の奥さんと連れ立って：」みんなで買い物を楽しんでいた。

来客が街のドラマに参加

「台場一丁目商店街」では、ちよつとおめかしして行つた「銀座通り」、家事が終わってひと息



した後に行った『近所の商店街』、お父さんが会社帰りにちよつと寄り道した『駅前ガード下横丁』、あこがれの『映画館・ボーリング場』、モダンなレストランがあった『娯楽商店街』など…、さまざまな買い物シーンを演出している。また、街角のそここに『うんちく貼紙』を貼り付け、昭和三十年代に実際に起こった出来事、流行った事などを紹介し、来客が街のドラマに参加できる空間を作り出している。

テナントの構成は、昭和三十年代を思い出すようなレトロな物を売る店、商品こそ現代に焼き直されているものの、当時のおいを醸し出す構えの店舗など、バラエティ豊かである。共通するのは、ここでもしか買えない物、ここでもしか受けられないサービス、ここでもしか得られない味、を重視し、賛同が得られた店舗が outlet している。

江戸雑貨を扱う「下町の老舗」、和をテーマにしたキャラクターグッズ、有名ブランドを特別価格で提供する「洋装店」、インポートブランドを



ベーゴマ道場

出しの日」とし、各店が店頭で演出し、唐草模様の風呂敷の上に商品を置いて、特売品をアピールするほか、バナナのたたき売り、「台場一丁目青年団」によるお笑い芸人寄席、紙芝居、チンドン屋さん、「青春おやじの辻説法」など、昔懐かしい昭和三十年代の下町の商店街を演

扱う「質屋」、きものリサイクルの「和装店」、家族写真撮影もできる「写真店」、日用雑貨・服飾雑貨を幅広く卸値で提供する「下町問屋」、オムライスやライスカレーなどが味わえる「お台場ハイカラ食堂」、緑日屋台風の「和食フードコート（提灯横丁）」、和紙などを扱う「和洋文具店」など、個性豊かな店が並ぶ。

● 昔懐かしいイベントを実施

運営面では、つつい参加したくなり、かつ、昭和を彷彿とさせる懐かしいイベントを実施している。毎月第一土日は、「二丁目大売



修学旅行生の総合学習（販売体験）

出し、にぎわいを再現している。

また、毎月第二土日には、「一投入魂！」「二丁目ベーゴマ道場」と題して、来客に無料でベーゴマを貸し出し、初心者から名人までが楽しめるイベントを行っている。五月には、川口市の川口リリア公園会場、池袋のナンジャタウン会場とともに「第一回ベーゴマ大会 夕焼け小焼け杯」を開催した。初めてベーゴマを体験する子供と、懐かしさのあまり熱中してしまう父とのコミュニケーションなどが見受けられる。また、その姿が、演出された擬似空間にリアルな風景をかもし出している。

● 修学旅行生の総合学習の場にも

ほかには、地方からの修学旅行生の総合学習の場としての活用も提案している。修学旅行生に、

地元の名産品を「台場一丁目商店街」の中で販売してもらい、売り上げは同じ臨海進出企業であるフジテレビのFNSチャリティへの寄付をお願いしている。このプランには、修学旅行生が自分たちの地域の学習・販売体験・慈善事業への参加などが、複合的に経験できると評価を得ている。

このように、自然な人と人とのコミュニケーションがフロアのにぎわいを生み出す、新しい形でのショッピングゾーンの構築を目指している。



「町並みフェスト」でにぎわい創出

「蔵の町」で市街地を活性化



須坂市まちづくり推進部まちづくり課
まちづくり係長 ● 駒津幸男

土蔵造りの街並みの魅力を再発見

須坂市は、長野県の北部善光寺平の東部に位置し、善光寺のご開帳でにぎわった長野市、クリと北斎で有名な小布施町に隣接した人口約五万四千人の小都市。年間降水量は約千ミリで、比較的積雪も多くなく、住みやすい気候条件となっている。

旧須坂町は、江戸時代に須坂藩（堀家、一万二千石）の陣屋が設けられた。館町としての須坂は、交通の要衝であることも加わり、経済的にもこの地域の中心として発展してきた。周囲の農村地域も、千曲川沿い低地の水田の開拓、山村地域の養蚕業の発達などによって、時代を追って豊かさを増した。千曲川畔の福島宿から仁礼宿を経て、群馬県側の大笹宿に至る大笹街道は、江戸までの距離が短い

ため、人馬の交通でにぎわった。

明治、大正時代の旧須坂町は、いち早く機械製糸を導入したことにより、全国屈指の製糸の都市として繁栄した。周囲の農村も蚕糸業により栄え、昭和に入ると、果樹栽培も盛んに行われるようになった。



にぎわいを取り戻した商店街

明治期から大正期に建てられた豪壮な土蔵の町家が多数残っていることは、最近まで一般的に知られていなかった。地元市民には周知のことではあったが、長く見慣れてきた風景なので、とりたてて評価を論じることはなかった。

しかし、昭和六十年代前半から須坂の土蔵造りの街並みの魅力が、他の地域の人も広く知られるようになってきた。その発端は、昭和六十年四月から地元新聞に百回にわたり連載された「須高地区の民家と町並み」（絵と文章）で、須坂の町並みと民家の

美しさやその背景にある歴史と生活が、地元市民に広く認識されることになった。

次いで昭和六十一年にはこれがきっかけになり、「須坂の町並みに先人の心意気と創造性を見いだし、学び、個性と誇りあるふるさと須坂の文化的都市を目指し、心豊かなまちづくり、住み良い生活環境、産業振興に寄与する」ことを目的とする、「信州須坂町並みの会」が市民有志によって結成された。この会は歴史的風土と環境に調和し、須坂らしい街並みの景観に寄与した建築物や、街並み景観の向上に努力した団体または個人を表彰することにより、市民や街並み景観への認識を深め、より良いまちづくりに貢献するための「信州須坂町並み景観賞」を創設したり、「町並みはみんなのもの」という観点から講演会の開催、ガイド養成講座など、さまざまな活動を行っている。

街並み景観育成のイベントを展開

自らの街並み景観を守り育てるために、須坂の街並みの案内図を入れた「町並みかわら版」を作成して行われる、「信州須坂町並みフェスト」は代表的なイベントである。

このフェストは毎回テーマを明確にし、今回は何代にもわたって須坂に生きてきた先人たちのかけがえのない命の姿が「町並み」であると理解し、大切にしながらも生きる道を模索してきた。そして次の世代にも古い街並みを大事にしていってほしいと願う意味から、子供たちに「体でまちを味わい、知ってもらおう」と考え、学校の先生や学校に協力してきた特技を持つ人たちと、手を



つなぎながらの「子供達の町並み天国」、同時に名家のお庭開放・お座敷拝見イベント、さらにさまざまなまちづくり主体の協力を得た「歩き、体験していただく」イベントを展開、大変にぎわった。結成十七年目を迎える信州須坂町並みの会は、フェストの開催のみならず会員、市民への啓発、さらに市との連携・協力を得て、「蔵の町」として中心市街地を中核に活性化の取り組みを展開している。

三百四十七の蔵造り建物を修理

一方、行政は貴重な文化遺産である蔵造りの建物や街並みを後世に残そうと、平成五年から須坂地区歴史的景観保存対策事業（修理・修景事業）を行って。平成元年の調査で明らかになった市内中心部に残る三百四十七の蔵造り建物の外観の修理、新築の建築物や工作物を周囲の景観に調和させる修景事業に補助を行うもので、平成五年度から十四年度までに合せて百八十四軒に対し、補助を行った。

この事業により、傷みの激しかった蔵造りの建物が美しく修理されたり、新築の家屋が伝統的な蔵づくりを模して造られるなど、街並み景観が徐々に整えられつつある。歴史的建築物を所有している地域住民からも「何かをしなければ、今のままではいけない。行政を批判し理屈をこねていても、自ら動かなければ良くはならない」との意見が広がり、まちづくり協定を締結するなど、積極的に事業に協力している。

また、明治末期に製糸工場の繭の貯蔵庫として

建設された三階建ての倉庫を、須坂市の歴史を後世に伝える貴重な文化財産として取得、整備した「ふれあい館まゆぐら」は、街を歩いている人の休憩スポットとして、大変喜ばれている。

ボランティアが来訪者をサービス

館内では地区ボランティアによるお茶のサービスがあったり、信州須坂町並みの会の機織り部会による須坂紬の手織りも体験でき、足を休めてもらうとともに、地元の人たちとの触れ合いも楽しめる。

近隣には、蔵をギャラリーショップとして活用した「蔵のまちギャラリーぶらり館」がある。これは市のミニ博物館設置事業補助金を活用したもので、誰もが気軽に立ち寄れるスペースを生み出している。また市の空き店舗対策事業を活用した喫茶店もでき、メニューも地元の食材や郷土料理に添ったおもてなしをしており、大変好評を得ている。

空き店舗の活用が課題に

さて、こうした蔵の街並みが残る中心市街地は空洞化が進んでおり、商店街空き店舗活用事業や商店街街角ふれあいミニギャラリー整備事業など、行政としての商業サイドの支援事業もあるが、現実には店をやめてしまう人が増えている。また、修理修景事業についても実施個所が点在してお



ストリートパフォーマンスでちんどん屋も登場

り、事業の効果がなかなか見えてこないという批判もあることから、修理修景事業の実施率が四割を超えた地区に絞って、にぎわい創出事業を展開できるよう、TMO構想の中でもさまざまな計画が行われている。

市内には毎年、農林水産大臣賞などを獲得

する味噌醤油屋、造り酒屋など多くあり、それらの人の理解を得る中で、空き店舗を活用した集客施設などの配置も考えられている。飲食店経営者と味噌製造業者の有志が手を組み、自慢の味噌を使った料理を売り出そうと立ち上がったグループ、ラーメンを通じて須坂のまちづくりを考える会など、それぞれのまちづくり主体が地域の歴史や文化を活かす中で生まれてきている。行政主導でないまちづくりが展開され、行政としてはそんなグループが困った時に速やかに支援できるよう施策を充実できればと願っている。

まちづくりには大変な時間がかかるが、市民グループの活動から行政が刺激され、支援策を講じ、民間グループがまちづくりの主体をなす活動が、いよいよ本格化してきた。身の丈に合った活動が訪れる人に安らぎと潤いを与え、共に須坂が成長できる喜びをみんなで感じられるよう進めていきたいと思う。



公設民営の「日本昭和村」が四月にオープン

——昭和三十年代前半の山里の景観を再現

岐阜県が美濃加茂市に整備し、今年四月にオープンした平成記念公園「日本昭和村」には、開園以降の二カ月間でおおよそ三十五万人が訪れた。

この公園は、「人と人、人と自然との共生」を理念に、ホタルやメダカが生息する小川・溪谷、小鳥や昆虫が生息する里山林、棚田・茶畑・桑畑などを整備し、豊かな自然の中で循環型社会を形成していた昭和三十年代前半までの山里の景観を再現している。

農業公園的要素入れた平成記念公園

平成時代を記念する事業として市町村、民間団体、県職員からアイデアを募集したところ、最も多かったのが公園・観光レジャー施設。それを受け、平成元年度に公園整備を決定。以降、基本計画の策定、都市計画決定および事業認可、基本設計などを行った。平成十二年度には、早期完成、事業費の縮減、管理運営費の軽減の観点から整備計画を見直し、全国各地において地元自治体と協



岐阜県基盤整備部公園緑地課
主任 ● 渡部浩幸

働で農業公園を建設し、管理運営している株式会社ファームの提案を受け、農業公園的要素を取り入れた現計画に変更。計画に基づき同十三年度に工事に着手し、九カ所目の県営都市公園として同十五年四月十六日にオープンを迎えた。

園内は、入場門、岐阜県特産品の売店、道の駅などがある「正面広場ゾーン」、昭和前期の風景を再現しさまざまな体験教室を開催している「昭和村ゾーン」、動物ふれあい広場、ボート池、里山散策道などがある「自然ふれあいゾーン」、芝生広場、牧場、カヌー体験の水路などがある「野外活動ゾーン」の四つのエリアに分かれている。

開園面積は約八十ヘクタール、初年度には九十万人の入園者を見込んでいる。

入園料収入の範囲で管理運営

この公園の運営の特徴として、公設民営、県民協働という点が挙げられる。公設民営については、ファームのノウハウを活用し、県の後年度負担を

できる限り少なくする仕組みを取り入れた。平成十三年度に同社との間で調印した「管理運営にかかる基本合意書」においては、独立採算を目指し、利用料金（入園料）収入の範囲内で管理運営にかかる業務委託費を支払うと取り決めた。

また、入園料収入が業務の処理費用に達しない場合でも、業務水準を低下させることなく適切に実施すること、事業利益を県に還元する仕組みとしての営業料の支払いも取り決めている。

県民協働については、ボランティアにソフト面の運営で協力をいただいている。この公園では、見るだけでなく、さまざまな体験活動への参加を通じて、昭和前期を楽しんでもらっており、染色、機織りなどの「創作体験」をはじめ、竹とんぼ、お手玉づくりなどの「昭和のなつかし体験」、豆腐づくりなどの「食品加工体験」、田植え、稲刈りなどの「農業体験」、自然環境学習など、三世代で一緒に楽しんでもらえるさまざまな体験教室を用意しているが、これらの開催には県民ボランティア組織「平成記念公園昭和会」に協力いただいている。

開園の一年前から県広報誌やインターネットを通じて募集した結果、地元の高齢者、女性を中心に多数の人から応募があり、現在、約百四十人が活躍している。

なお、昭和前期の景観の再現にも県民協働で取り組んでおり、昭和初期のたたずまいを残す民家や古木を県内から公募し、多数の応募物件の中から大野郡宮村の旧宮小学校舎をはじめとする五棟の建物と二百八十本の古木を選定し、園内への移



築、移植を行った。

生涯学習や見本市など 多面的な役割

平成記念公園「日本昭和村」は、次のような役割を担う複合拠点施設となっている。

「古き良きものを見直す」「温故知新」運動の舞台

古き良きものを大切にしながら、それをもとに新しいものを創っていく精神を取り戻すため、県民と協働し、生涯学習の一環として「温故知新」運動を推進しているが、その舞台としての役割を担う。園内の芝居小屋・映像館「昭和座」や今年度整備する能楽堂において、伝統芸能や芝居、大道芸などを幅広く上演するとともに、これらの施設をアマチュアなどの発表の場として提供し、伝統芸能などの振興を図っていく。

「県内産農林産物をはじめとする県産品などの見本市」

園内には、岐阜県の特産品売店「おんさい館」や生鮮野菜を扱う「青空市場」、また昭和の食べ物や郷土料理が味わえるレストランがあるが、ここでは県内産のものを積極的に活用し、消費拡大を目指す。安全・安心・健康な県内産農林水産物や、生産者の顔が見える地元の新鮮な野菜、果樹などを食べ、飲み、買うことができる「飛騨美濃農業見本市」、岐阜特産品の総合展示販売所としての役割を担っている。



昭和村ゾーン街エリア「食の工房」(上)と芝居小屋・映像館「昭和座」

「県下の道の駅・観光の総合情報センター」

この公園は道の駅「日本昭和村」を併設している。道路規制や渋滞状況など、さまざまな道路情報に加え、県内の「道の駅」や飛騨・美濃の観光情報を総合的に発信する総合情報センターとしての役割を担っている。

「美濃ミュージアム街道」の中心拠点に

現在、県南部の美濃地方では東海環状自動車道の整備が進んでおり、愛知県瀬戸市周辺で日本国際博覧会が開催される二〇〇五年には、関JCTから愛知県の豊田JCT間が開通する予定となっている。

岐阜県内の同自動車道沿線には、美濃焼(東濃圏域)、刃物、美濃和紙(中濃圏域)、ファッション(岐阜圏域)などの地場産業をはじめ、農業、

航空宇宙、IT(情報技術)などの産業中核拠点施設、またセラミックパークMINO(多治見市)、花フェスタ記念公園(可児市)、岐阜県博物館(関市)などの県立施設が並ぶ。さらに、平成十六年夏には河川環境楽園(川島町)に世界淡水魚園・淡水水族館、同十七年春には花フェスタ記念公園に世界一のバラ園がオープンを予定している。

岐阜県では、これらの中核拠点施設をネットワーク化し、産業文化観光を振興する「美濃ミュージアム街道」という施策を展開し、飛騨・美濃がパランスの取れた交流の場となるよう取り組んでいるが、平成記念公園「日本昭和村」はその中心拠点としての役割も併せ持つ。美濃加茂ICに隣接する当公園では、今年度からハイウェイ・オアシスの整備に取り組む。

リピーター確保のソフト対策が課題に

開園以来、多くの人が訪れ、「静かでのどかで癒される」「良い運動になった」などと、好評を得ている。今後の課題はリピーター確保にあると考えており、能楽堂、銭湯などのハード整備やイベントの開催をはじめとするソフト面の充実を図り、「二〇〇五年日本国際博覧会」を支援する県内主要施設として、魅力ある公園づくりに取り組むこととしている。



地域性、歴史性の発展的継承と居住地の魅力づくり

—環濠都市の「平野郷」でHOPEゾーン事業を展開



大阪市住宅局企画部住環境計画課
主査 ● 鶴丸達也

昨今、住民参加のまちづくりが話題になって久しいが、大阪市において歴史的文化的資源を抱える地区で、その資源を生かしたまちづくりを住民と一緒に進めている。

昭和五十八年に創設された国土交通省のHOPE（地域住宅）計画は、「地域に根ざした住まい・まちづくり」の展開を進めるものである。この制度の目指すところは、それぞれの地域の気候・風土、伝統、文化、地場産業などの財産を大切にしながら、地域の発意と創意により住宅づくり・まちづくりを推進することにある。

大阪市ではその一環として、昭和六十一年に策定した二十一世紀都市居住イベント構想（大阪市HOPE計画）に基づいて、「都市居住の魅力の創出とその活性化」を基本理念に、ソフト面での住宅施策を総合的に行っている。この計画は、従来から実施している住

宅建設や住環境整備などのハード面での住宅施策に加え、都市居住に対する人々の関心を高め、その魅力を探り出そうとするものである。

都市居住イメージを高める住宅立地を誘導

大阪市HOPE計画の一つとして、本市は大阪にふさわしい特色ある居住環境を形成すべきゾーンを設定し、居住上の魅力を広く市民にPRする

とともに、大阪の都市居住イメージを高める質の高い住宅

の立地を誘導しようとしている。市はHOPEゾーンを二カ所選定しており、一カ所は戦国時代に自衛のため、まちを環濠と土居をもって囲み、自治都市として栄えた平野郷、もう一カ所は国宝建築の本殿を有する住吉大社の周辺を選定した。本稿では、一年早く事業化した平野郷について紹介する。

HOPEゾーン事業は、大阪市HOPE計画に基づいて、歴史的な街並みや景観などの地域特性を活かし、魅力ある住宅地の形成を図る施策の一つとして進めている事業である。すなわち、「地域性、歴史性の発展的継承と居住地の魅力づくり」に向け、特色ある居住環境を形成すべきゾーンを設定し、地域住民と協力しながら、アメニティ豊かな住宅・住環境の形成と誘導を図るものである。

具体的には、まちづくり協議会の活動へ助成したり、街並みガイドラインに沿った建物などの改修工事費の一部に補助を行うとともに、道路・公園などの公共施設の修景整備を行い、歴史的な街並みを活かした、良好な住宅地整備を進めようとするものである。本事業は、



夏祭り



祭りの際に吊るされるちょうちん

国土交通省の補助制度である街並み環境整備事業を活用している。まちづくり協議会の活動費、現況調査費や整備方針の策定費、道路の美装化やポケットパークの整備費、住宅の修景整備費などの補助項目が用意されている。



歴史的雰囲気伝える平野郷

平野郷は、大阪市の南東部に位置する広さ約八ヘクタール、人口約一万三千人の地区。平安時代から開けたまちで、交通の要衝として商業が発展し、戦国時代には自衛のため、まちを環濠と土居をもって囲み、町民合意でまちを運営する自治都市として、堺と並び日本の近世史にその足跡を残している。現在環濠はほとんど埋め立てられているが、濠を埋め立てて形成された曲線状の道路や、

環濠の入口であった十三口の木戸門跡付近に残る地藏堂など、当時の面影が今もなお残っている。

旧環濠内の町割りには、大阪夏の陣で焼失後、江戸時代初期に再整備され、道路はおおむね幅員四・六メートルで、直線で格子状の街路構成となっており、以後現在まで継承されている。また、区域内には建築年が江戸後期から昭和初期までの町家や寺社が全体の約三割を占め、歴史的雰囲気を伝えている。

現在においても、夏祭り（右写真真上）や住民によるさまざまな活動が盛んであり、歴史的・文化的に豊かなまちである。

住民参加の「まちなみガイドライン」を作成

これまで親しまれてきた平野の街並みの良い点を受け継ぎ、魅力ある住宅地の形成を目指して、まちづくり協議会を中心とした住民参加の「まちなみガイドライン」を平成十二年に作成した。この中で「平野らしさ」を具体的に表わす街並み・住まいづくりのテーマを、祭りの際に道路に面した深い軒先につるされるちようちん（右写真真下）をイメージして、『祭りちようちんが似合うまちなみ』としており、軒庇が連続した街並みを目指している。

歴史的文化的資源を最大限に活かしながら、HOPEゾーン事業と共に、魅力的な「まちなみ」を将来に引き継ぐことを目的として、まちづくり協議会が設立されているが、その協議会が行う次のような活動に

助成を行う。

- ・ ワークショップ、勉強会、専門家相談会の開催
- ・ 「まちなみ」形成のための提言
- ・ 「まちなみ」形成のための広報・啓発活動
- ・ 講演会、シンポジウムの開催
- ・ 他都市事例見学会の開催など

地区内の道路などの公共施設について、街並みにふさわしい修景整備を、ワークショップや勉強会を行って、協議会をはじめとする住民の意見を聞きながら進めていく。（写真①②）

住宅の修景整備でまちの魅力を再認識

地区内の住宅などの修復・増改築・新築のほか、塀・門などの設置に際して、伝統的な瓦屋根や道路に面した塗り壁、深い軒庇の設置、景観に考慮した看板デザインなど、ガイドラインに適合する工事に対して、その費用の三分の二（百九十九・四七五万円を限度）の補助を行う。（写真③④）

HOPEゾーン事業は、その期間がおおむね十年であるが、平野郷地区や住吉大社周辺地区のように千年以上の歴史に培われたまちを、ハード面で全面的に再整備することはできない。しかしポイント的に住宅などの修景整備の事業の事例を散りばめることで、まちの魅力を住民に再認識してもらい、自主的に街並みへの配慮をしてもらうよう誘導できれば、一定の効果があつたと評価できる。まだ事業が始まったばかりなので、今後のまちの動向を見ながら事業を展開していく必要がある。



③修景前



④修景後



①修景前



②修景後

達成感を求め、みんなが踊る



北海道新聞社
論説副主幹

本間至能富

札幌の「YOSAKOI（よさこい）ソーラン祭り」という群舞のイベントは、その名の通り、高知の「よさこい鳴子祭り」をまねて、十一年前に始められた。

だから、「北海道に根差したものではない、二番煎じのイベント」という批判がいつも付きまとう。踊り手グループの衣装や振り付けに対し、「派手になりすぎた」「商業主義が目につく」という批判もある。

批判はそれなりに当たっているのだが、葵（あおい）えるどころか、今年も六月四日から五日間開かれ、大いに盛り上がり、にぎわった。新参ものの祭りが、多くの人を引き付け、ここまです成長を遂げたのはなぜか。祭りの熱気はいろいろなことを考えさせてくれる。

この祭りは、高知のよさこい祭りの躍動感あふれる踊りに感動した北海道大学の一人の学生が、仲間と呼びかけて、一九九二年に始めた。

地域や職場、学校などのチームが、路上やステージで、オリジナルの群舞を披露する。ルールは、曲に北海道の民謡「ソーラン節」の一部を入れること、そして高知名物の鳴子を持って踊ることの二つだけだ。

一回目の参加はわずか十チーム、千人だったが、年ごとに増え、今年には三百三十チーム、約三万四千人を数えた。観客数も増え、祭りの組織委員会が、今年の観客を過去最高の二百三万人と発表した。イベントとしては大先輩の「さっぽろ雪まつり」に肉薄する規模である。いまや、札幌というよりは北海道全体の初夏の一大イベントと言っている。チームは北海道の津々浦々から集まり、最近では本州からの参加も増えている。

祭りの主役は、あくまでも踊り手たちだ。顔に奇抜な化粧をほどこし、チームごとにデザインの違い、衣装をまとっている。せいぜい五、六分の間だが、ロック調の音楽に合わ

せて、エネルギーに全身を使って踊る。終わった時には若者たちも肩で息をするほどの激しい運動量だ。それなのに北海道各地から参加したチームの踊り手たちを見ると、五、六十歳代の女性が意外に多いのに驚く。

多くのチームは、プロなどの指導を受けて、振り付けを考え、一年かけて練習を重ね、晴れの舞台に備える。踊っている時は、街を舞台に、踊り手一人一人が主役を演じている気分なのだろう。普段とは違う自分に酔いしれているようにも見える。そして踊り終わった後の顔はみんな、厳しい練習を乗り越えた達成感、充実感にあふれている。

普通に暮らしている人は、自分を持つさまざまな力を実感したり、達成感を得ることが難しい時代である。何か自分が夢中になって打ち込めるものはないか。挑戦すべきものを漠然と探し求めている人たちを、

この祭りが捕らえたのではないかな。そう考えると、この祭りが老若男女を問わず、これだけの踊り手を集めるようになった理由も分かる気がする。

学生を中心に始まり、その後も経済界の協力を得ながら民間主導で運営されているという特徴は誇っている。だが、人々の好みが多様化した時代に、今後も新しい踊り手たちを引き付け続けることができるだろうか。

それは、踊りに自己実現を求める人たちの思いをしっかりと受け止め、誠実な運営を続けていけるかどうかにかかっている。

観客を代表するような声を新聞で見つけた。「今年の初夏も凛々（りんりん）とすける夜気の中に、生きるための勇気をしっかりと受け止めた。YOSAKOI、ありがとう。いつまでもアマチュアらしさを失わないでほしい」。投書の主は、踊りに感動した六十七歳の男性だった。



運河沿いの倉庫 ● 北海道小樽市

かつて北海道経済の中心であった港町小樽は、歴史的な建物が多く残されている。運河沿いには明治・大正期に造られた倉庫が連なり、散策路を歩く人をノスタルジックな世界へと誘う。石造り倉庫はレストランやガラスなどのショップとして再利用され、多くの観光客でにぎわう。郊外にも、おたる水族館、断崖絶壁を観光船から楽しめるオタモイ海岸、小樽市街を一望できる天狗山、朝里川温泉郷など見どころが多い。

郷愁を誘うまちづくり



大平宿 ● 長野県飯田市

飯田市中心から大平街道を20キロほど西へたどると、中央アルプス南部に位置する山間地に石置き屋根と“せいが造り”の古びた民家が約27戸ほど点在する。そこが大平宿。この集落は、宝暦4年(1754)から約200年余続いた宿場町で、山林と養蚕のほかに大平街道を往来する人たちの旅館も営んでいたが、過疎のために昭和45年11月に集団移住して集落は消滅した。現在は家の持ち主から「大平宿をのこす会」が借り受け、現代生活で失われた生活の原点を体験したい人たちに利用されている。現存する建物は、いずれも建築年代が江戸末期から明治中・末期の古い民家で、いろいろ道具類も昔のままに残されている。





ハイカラ横丁 横浜店 ● 横浜市

ハイカラ横丁は駄菓子屋、おもちゃ屋、薬屋、よろずや、プロマイド屋、正直村ストアー、まめや、骨董屋からなる昭和30年代をイメージした、なつかしい商店街。薬屋さんには一般の薬と富山の配置薬を扱っており、350種類ある配置薬はパッケージが昭和初期から変わっていないため、年配の人には懐かしく、また若い人には新鮮でかわいいと人気。商店街の真ん中には、当時のお茶の間を再現した部屋があったり、土曜日には紙芝居もやって来る。



ラミュージメント・パーク 新横浜ラーメン博物館 ● 横浜市

昭和33年の夕焼けの下町に、全国から9軒の味なラーメン店が大集合。昔懐かしの駄菓子屋や、給食のあげパンなど、見て、遊んで、知的好奇心を満たしてくれる。ラーメン文化と歴史に関する展示ギャラリー、全国のお土産ラーメンやオリジナルグッズをそろえたショップなど、世界初の新横浜ラーメン博物館は、おいしさと楽しさを満載している。



萩ノ島環状かやぶき集落 ● 新潟県高柳町

高柳町の中心地から約4キロに位置する萩ノ島地区は、全国的にも珍しいかやぶきの環状集落。集落の半数の世帯がかやぶき家屋で、田んぼを囲むように点在しており、昔懐かしいふるさとの原風景と田舎のゆったりとした雰囲気が、見る人に安らぎを与える。同集落にはかやぶきの宿が2棟あり、田舎料理も堪能できる。



町家の風情 ● 滋賀県彦根市

彦根城の周辺には現在も江戸時代に建てられた町家が往時の風情を残し、訪れる人に落ち着いた静かなたたずまいを感じさせる。このような歴史的遺産を活かしたまちづくりを行うことにより、「夢京橋キャッスルロード地区」「花しょうぶ通り地区」などでは、にぎわいのある魅力的なまちが創出され、四季を通じたイベントや催しが開催されるようになるなど、景観を大切にしたい暮らしが見え隠れする「古くて新しいまち」として人々に親しまれている。



みろくの里 ● 広島県福山市

「いつか来た道」の入り口。福山市で使用していた建物を移築。中にははかりなどの備品も残っている。丸いポストは、地元郵便局が回収しており投函可能。



駄菓子屋には懐かしくじ付きの駄菓子や、ペーゴマなどのおもちゃがあり一番の人気スポット。明治から現代までの約200点の電話機を展示した「電話博物館」や、昭和30年代の重大ニュースを映像で流している「ニュース館」、さらにレコードジャケット、映画のポスターなどを展示した「懐かしの館」があり、見どころがいっぱい。

明治45年に建てられたれんが造り瓦ぶき平屋構造の建築物。昭和初期まで税関庁舎として使用された。



門司港レトロ・ナイトファンタジー ● 福岡県・門司港

明治・大正時代、国際貿易港として繁栄した門司港には、当時の面影をしのばせる古い街並みが残っている。「門司港レトロ」は、この古い街並みと新しい都市機能をうまく調和させた都市型観光地である。さまざまな照明パフォーマンスがダイナミックで繊細な夜間景観を演出している。



風格ある都市をめざして

那覇市は沖縄本島の南部に位置する人口約三十万人の県都である。本市を中心とする二十キロの円周内には、東京、平壤、ソウル、台北、北京、香港、マニラなど東南アジア主要都市があり、日本の南の玄関として要衝の地にある。そのため、琉球王朝の時代から海外交易が盛んで、地域の政治、経済、文化の中心的役割を果たしてきた。

かつての那覇は、琉球松の緑に囲まれた丘陵と琉球石灰岩の石畳や石垣、ガジュマルやフクギの木と赤瓦の家々に、漫湖や那覇港入江の水辺の景観とが相まって、「風光明媚な浮島」と呼ばれていたといわれる。しかし、去る大戦でそのほとんどが失われた。市民の血と汗のじむ努力で復興したが、市民の願いである平和で美しい那覇のまちづくりや国際商都・那覇の再生と発展という目標は、なかなか達成されていない。また近年、本市も情報化、環境問題、交通渋滞、少子高齢化社会の到来な

ど、新たな都市の課題も発生し、まちづくりは、次世代を見据えた的確で強力な対応が求められている。

私は、二十一世紀の到来とともに市政を担うことになり、この美しい島の環境を守り、市民が住みよい豊かな生活文化都市を、そして世界中の人々が行き交う国際交易都市を創造したいと思っている。

沖縄には、方言で「イチヤリバ、チョーデー」という言葉があり、「出会う人は皆、兄弟と同じである」という意味である。これは、世界の架け橋として活躍した先人からの精神的遺産とも呼べるもので、世界の人と交流する「心」を示している。

私は、二〇〇一年十一月の那覇市政八十周年記念事業で、この先人の国際的感性を表現し、市民と共有できることをしたいと考えた。そして、イデオロギーの世紀であった二十世紀を乗り越え、市民本意の政治を希求した、元ソ連大統領ゴルバチョフ

氏を講演に招聘することにした。

最初は、「元大統領が、この那覇に本来にきてくれるだろうか」と半信半疑で、いろいろな「ツテ」を頼り少しずつ手繰り寄せ、多くの方々のご協力を得て来ていただいた。その時の氏と市民の交流は非常に感動的で、すばらしい講演会となった。

翌年の十二月にはゴルバチョフ財団日本本部が那覇市に設置され、うれしい交流が続いている。

さて、現在の経済状況を反映し、那覇市も厳しい財政運営を強いられている。しかし、政策の「選択と集中」に努め、「市役所は市民に対する最大のサービス産業である」をスローガンに、住みよい豊かな生活文化都市を創造したいと思う。

昨年七月には、市民課の窓口サービスが品質に関する国際規格「ISO 9001」の認証を取得。今年九月には、環境マネジメントシステムの国際規格「ISO 14001」の

認証を取得すべく、全職員で取り組んでいる。

街の環境対策としてゼロエミッション推進室を創設し、廃棄物問題においては、市民一人ひとりが他人の迷惑の上に自らの幸せがあることを理解していただいて、ごみの分別・個別収集、有料化や減量化に取り組む、少しずつ成果がみえてきた。

二〇〇三年八月に、沖縄初の都市モノレールが那覇空港から首里城まで開通する。那覇市は、車窓からの景観美化と都市のヒートアイランド対策のため、屋上緑化を推進している。私も早速自宅の屋上に庭園を造り、市民の皆さんにも奨励中である。今は、個々の政策をスピーディーにやるのが大切である。より具体的な市民サービスの向上に努め、真に市民の立場から発想し、市民とともに山積する課題解決を図る中から、「風格ある県都・那覇市」として、活力あるまちづくりを進めていきたい。



那覇市長

翁長雄志



住民と行政が「ノスタルジックな煉瓦のまち」を実現

——ジャズ祭やフェスタ開催で地域活性化を推進



舞鶴市企画管理部企画政策室企画調整課
地域振興係長 ● 森口清滋

舞鶴市は、京都府北部に位置し、日本海のほぼ中央、入り江と岬が複雑に入り組んだリアス式海岸が特徴の若狭湾の最奥部に面しており、海と山の豊かな自然に恵まれた面積約三四二平方キロ、人口九万四千人のまちである。

現在の舞鶴市は十六世紀末、古今和歌集の伝授で名高い細川藤孝（幽斎）が築いた城下町として栄えた西地区と、明治以来軍港の町として発展してきた東地区が、一九四三年（昭和十八年）に合併し、成立したまちで、本年度で市制六十周年を迎えた。

日本有数の赤煉瓦のまち

東地区は、一九〇一年（明治三十四年）、旧海軍舞鶴鎮守府が開庁し、初代長官として東郷平八郎（当時の海軍中将）が赴任した時に現在の街並みの原型が形作られた。それを機に、鉄道、道路、水道など近代的なインフラが一挙に整備され、魚雷や銃砲などの倉庫をはじめとして、砲台、トンネル、橋梁、浄化施設など多種多様な煉瓦建造物

が建築された。現在でも、市内には百二十余の煉瓦建造物が残っており、今では日本有数の赤煉瓦のまちとなっている。

中でも、市役所周辺の北吸地区には、十二棟の赤煉瓦倉庫が林立しており、「群」として残っていることから、近代化遺産の歴史的環境保存地区として内外から注目されている。

また、一級河川由良川の河口にある神崎地区には、鎮守府の開庁に伴う煉瓦の需要を見込んで操業した煉瓦工場の窯が残っている。煉瓦づくりには、海運を利用しながら、原料の粘土と砂を選び、完成品は海上輸送で旧海軍に納められ、煉瓦倉庫の建設に使われた。最盛期には、粘土を積んだ十数隻の伝馬船が川筋を往来した、と言われている。

さらに、この窯は、連続燃焼して煉瓦を製造するホフマン輪窯と言われ、全国に四基しか残っていない貴重なものであり、老朽化が進む中、現在



ホフマン式輪窯

市民の間で、その保存運動が起きている。このように現存する多様な赤煉瓦建造物は、ふるさと舞鶴の個性であるとともに、貴重な歴史遺産であり、それを見直そうという市民の活発な活動と行政が連携し合いながら、赤煉瓦を活かしたまちづくりが推進されている。

一九八九年、赤煉瓦倉庫群のある北吸地区を含む舞鶴湾地区が、リゾート構想の重点地区に指定され、正式に赤煉瓦倉庫が舞鶴の資源として、その価値が評価された。

同年十二月、市職員の自主研究組織「まちづくり推進調査研究会」は、市の書庫兼印刷工場である赤煉瓦倉庫のライトアップを開始し、名実ともに初めて光を当てた「舞鶴の赤煉瓦物語」が本格的に動きだすこととなった。

また、市職員を中心に「まいづる建築探偵団」が結成され、市外の研究者などの協力を得ながら、市内に残る赤煉瓦建造物の調査を行い、一年間で六十件余の赤煉瓦建造物を発見し、赤煉瓦マップを作成している。

「赤煉瓦ネットワーク」を設立

さらに翌年六月には、小樽や函館を視察する「ベイエリア探訪in北海道」が企画され、市民百人がフェリーに乗船し、海辺や赤煉瓦の活用に関



する熱い議論を交わした。

そして同年十一月、「第一回赤煉瓦シンポジウム」が開催され、全国十九都市から二百人が舞鶴に相集い、赤煉瓦は地域の資源から日本の資源へと一步を踏み出した。

そこで、全国の赤煉瓦にゆかりのあるまちをつなぎ、互いに個性的なまちづくりを進めるための組織「赤煉瓦ネットワーク」の設立も決定され、現在でもその組織は各地の情報を共有し、人づくりにも寄与するものとなっている。

一九九一年六月、市民を中心とした二百人の会員からなる「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が発足、八月には赤煉瓦倉庫群の空間を利用した野外ステージで「赤煉瓦サマージャズ・イン舞鶴」を開催。ジャズ祭は今年で十三回目を迎え（今年は八月二日～三日）、今では舞鶴の夏の風物詩となっている。

世界初の「赤れんが博物館」オープン

市では、「赤煉瓦のまち舞鶴」のPRのため、一九九三年から赤煉瓦倉庫群を会場に「赤れんがフェスタ」を開催している。百以上の作家が集まるアート&クラフトフェアや旧軍港四市グルメ交流、ミニ煉瓦づくりなど、多くの市民の協力により、盛大に開催されている。（本年は十月十一日～十二日開催）。

さらに、「第一回赤れんがフェスタ」の開催に



赤煉瓦倉庫でジャズフェスティバルを開催

英国ポーツマス市との姉妹都市提携が実現するなど、多様な連携にも発展している。

市庁舎の「顔」にも利用

「赤煉瓦博物館」の開館に続き、一九九四年十月、

同じく旧海軍の第三砲銃庫であり、市の書庫兼印刷工場として利用されていた赤煉瓦倉庫を「市政記念館」として再生。市の歴史紹介や小ホールと喫茶などを備えているため、今では市庁舎の顔として、圧倒的な存在感を示し、市外からの来庁者にうらやましがられる建物となっている。

また、現在の市政記



赤煉瓦博物館

併せ、一九〇三年（明治三十六年）建築の旧海軍の魚形水雷庫を再生した「赤れんが博物館」がオープン。これは、鉄骨煉瓦造としては日本で最古級の建物であるとともに、世界四大文明をはじめ、世界の煉瓦を収集・展示した世界で初の博物館であり、年間七万余人が来館している。

そして、その博物館へ煉瓦を寄贈したことが「縁」となり、舞鶴で百年間引き継がれてきたこれらの赤煉瓦建造物は、新たな時代に新たな意味を持ち、それがまちの個性となった。先人から引き継いだものに、私たちが新しい息を吹き込み、まちの宝物に磨き上げている。

まちの「光輝く宝物」に

市では現在、赤煉瓦をはじめとする舞鶴の誇る個性的な資産について、京都橘女子大学と連携し、市民参加による研究会やワークショップなどを開催しながら、未来に向って、さらなる具体的な活用方策の研究を行なっている。

国においても、舞鶴の赤煉瓦を中心とした近代建築は、大変注目されており、文化庁の調査が本格的に実施される中で、「舞鶴の赤煉瓦」は、保存再生しながらさらに「光輝く宝物」として、確実に動きだしている。



レトロショップ紹介パンフレットで 商店街活性化

—忘れかけていた情景を案内して感動誘う



尾道市産業文化部商工課商工振興係

主任 ● 岡田正弘

古くから海上交通の要衝の地として栄えた尾道市は、海岸近くまでせり出した山と、尾道水道に挟まれた狭い带状の地域に中心市街地が形成された。平坦部に一直線に伸びる商店街を軸に、商業施設や都市機能が集中し、多くの神社仏閣などの歴史的資源や斜面市街地の坂道、港の景色、風情を感じさせる生活風景など、地域固有の街並みが色濃く現在まで残されている。

ここ数年で、瀬戸内しまなみ海道の開通をはじめ、尾道駅前地区市街地再開発ビルの竣工、市立尾道大学の開学など、プロジェクトといわれる大型事業は



千光寺山から新尾道大橋を眺望



老舗の酒屋



銭湯を改造した喫茶店



古い薬味ダンスがある薬屋

おおむね完了した。これからは、現在保有しているさまざまな資源をいかに活用し、磨きを掛けていくかが問われていると考えている。智恵を出して、少ない予算でも効果的な事業の展開、それに市民の感覚やアイデアをまちづくりに活かしていくことが大切であろう。

● 職員のアイデアをまちづくりに活かす

そこで、まずは職員のアイデアからということと、二〇〇二年度予算編成の前に全職員を対象に、尾道の持っているポテンシャルを活かしたまちづ

くりをテーマとした、事業のアイデア募集が行われた。多くのアイデアが提案され、採用された3つのアイデアの一つが、ここで紹介する「レトロショップ巡りinおのみち」パンフレット作成事業である。

戦火を免れた街並みは多くの歴史的・文化的遺産が現存し、その資源を活用する形で「古寺めぐり」、「文学のこみち」、大林映画の「ロケ地めぐり」など、観光・文化をテーマにして、その利便性や回遊性を向上させるためのパンフレットは既に定着し、尾道を訪れる人たちの多様な楽しみ方のメニューの一つとなっている。

● 観光客や市民に 街の魅力の再発見を期待

本事業は、中心商業地の商店にスポットライトを当て、観光客はもとより、少し足の遠のいている市民にも商店や街の魅力の再発見、街歩きのエッセンスにしてみようという狙いで企画し、進めてきた。

しかし、実際に営業を続けている商店を行政がパンフレットとして作成するテーマは、今までにない一歩前に進んだものであり、実施方法を間違えれば行政の公平性やそのスタンスを問われる可能性もあったため、商店の採用に際しては公募とすることにした。

また、「レトロ」という言葉のとらえ方に対しては決まった定義はなく、年齢や性別はもとより、個人の興味の領域まで及ぶことか



ら、幅広い意見を求めるために「あなたがレトロショップだと感じるお店を紹介してください」という点に絞ることにした。

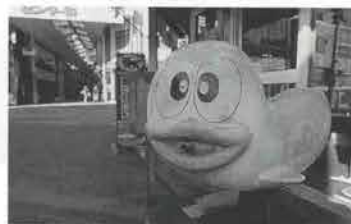
公募の結果は、自薦、他薦合わせ八十六件の応募があり、重複分を除くと実数は七十件と、当初考えていたより多くの推薦をいただくとともに、予想通り、個々のイメージするレトロというものが浮かび上がる結果になった。

高校生の時よく通った駄菓子屋が懐かしいという二十代のOL、林美子や志賀直哉、小津安二郎にまつわる店を紹介してくれた七十代の男性など、老舗といわれる店からレトロ調をイメージし、最近開業した店までの広範囲にわたった。推薦者一人ひとりが持っているレトロというイメージ、思いは、尾道という街までも再認識させられる結果となった。

掲載店決定に際する 公平性確保に配慮

掲載店の決定に関しては、公平性を保つため、専門的見地から意見を求める選考委員を、市民の代表にお願いした。商店の歴史に詳しい人、実際に中心商業地で商売をしている人、独自に斜面市街地の空家を活用し始めた市民、建築や文化財の専門家、消費者の立場として加わってもらった市民など総勢十一人である。

三回開催された選考委員会では、自由討論を中心に議論を進めた。それぞれが持つレトロというイメージに始まり、街の歴史や文化に触れたり、商売をする上での考え方など、作成意図を踏まえ、活発で前向きな多くの意見を得ることができた。



今でも10円を入れると動くオバQ



昔ながらの酒屋



昔のままの商品陳列の乾物屋

できるだけ多くの商店を紹介しようということになり、掲載の了解を得た上で、パンフレットは完成した。観光客はもとより市民にとっても、懐かしいと感じる店や忘れていた店、今まで知らなかった店などを紹介することができる、魅力的な内容になったと思いつつ、市内の観光案内所や掲載店を中心に配布し、その反応をみることもとなった。

その結果、内容に関する苦情はなく、全般に好評で、市民や観光客がパンフレットを手を街を散策する姿が見受けられるようになった。また、テレビ・新聞をはじめ、多くのマスコミにも取り上げられたこともさらに効果を高める結果となった。



取材費、印刷費程度の予算での取り組みであ

ったが、市民の推薦により、観光客や多くの市民に対し、改めて紹介したい商店を掘り起こし、スポットライトを当てるという事業効果は、十分満

足できるものとなった。それは尾道が持つイメージ、ポテンシャルによるものが大きい。多くの市民や観光客が歴史的資源を支えてきた尾道の顔としての中心商業地を、大切に親しみを持って見つめている表れであると感じた。

公募の結果でも明らかのように、幅広い年代からさまざまなレトロショップを推薦していただいた。誰もが尾道のレトロショップはこれだという統一した結果ではなく、応募のあった商店は分散した。それは逆に強みであり、街や個々の商店に蓄積された独自の魅力があるということでもある。

ケータイ観光ナビからも情報発信

また、パンフレットの発行に合わせて、より多くの人に情報提供するとともに、さまざまな魅力を再発見し、まちづくりに参加してもらうため、今年四月に運用を開始した尾道ケータイ観光ナビ「どこでも博物館」(<http://www.dokohaku.net>)により、携帯電話からでも情報を得ることができるようになった。多くの人は是非、アクセスしていただきたい。

パンフレット発行後、数カ月が経過し、掲載店からは「パンフレットを持って店をのぞいていかれますよ」、「店の雰囲気も少し工夫するようになりまし」などと、うれしそうな返事が返ってきたことが、一番の成果かもしれない。



「うだつの町並み」保存を目指した まちづくり

—都市住民との交流による観光・リゾートタウン展開へ

脇町は、徳島県の中西部、吉野川の中流北岸に位置し、阿讃山脈を背後に控えた山紫水明のまちである。古くから吉野川北岸を東西に通じる撫養街道と、阿讃山脈を越えて高松市に至る讃岐街道の交差する要衝の地として重視され、江戸期から明治期にかけては、吉野川の水運を利用して阿波藍の集散地として栄え、明治期から昭和期にかけては、四国唯一の繭の集散地として発展してきた。

こうした地域の歴史や文化、風土や産業を豊かな自然環境の保全と併せ、活性化対策として推進するのが、「うだつのまちづくり」であり、都市と農村の交流によって新しい



町立図書館

農業を育むグリーン・ツーリズムである。



徳島県脇町長 ● 佐藤 淳

住民運動として盛り上がる

「うだつの町並み」とは、江戸期から明治中期にかけて栄えた、古い商家の立ち並ぶ南町地区の家並みのことで、本瓦葺き漆籠め壁、虫籠窓やしとみ戸などのある家々の屋根には「うだつ」が上がり、全国でも珍しい古い街並み景観を今に伝えている。「うだつ」とは、それらの家々の二階の隣家との境に設けられた火よけの壁のことで、「うだつが上がらない」という言葉からもうかがえるように、装飾を兼ねた豪華な火よけ壁を上げることが、当時の商人たちの繁栄と成功の象徴だった。



火よけ壁として設けられたうだつ

脇町に残されたこの貴重な歴史遺産を保存し、新たなまちづくりに活用していこうとする活動は、昭和五十年代から住民運動として盛り上がった。まず、老朽化の著しかった南町の一角の建物を修復、再生しようという計画が持ち上がり、昭和六十一年に最初の試みとして町立の図書館が完成した。

町の誇り・シンボルに発展

同六十三年に、全国で二十八カ所目の国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されてからは、行政サイドの町家の修復にも熱が入り、住民の間にも町の誇り、シンボルとして心に刻み込まれるようになった。住民主体の「うだつの城下祭り」の取り組みや、「南町町並み保存会」の結成へと動いていった。

平成十年には、念願の電線類の地中化が行われ、一層昔ながらの景観がよみがえってきた。新たに建設される建物には「うだつ」の景観を念頭にして取り組み、大型ショッピングセンターにも伝統的な外観を持たせるなど、新名所が次々に誕生した。子供たちにも、ふるさとへの誇りや郷土愛を持ってもらおうと、小



学校や中学校の校舎にも、土蔵造りやうだつを上げた建築イメージを導入した。

観光客の増加にボランティアが対応

こうした努力が、明石海峡大橋の開通とも相まって見事に実った。うなぎ上りに増える観光客に対応するため、平成八年に発足した「ボランティア観光ガイド」をより充実した。住民たち自らがうだつの町並みを詳しく説明し、温かいもてなしの心でお迎えしようというものである。現在、メンバーは男女合わせて十八人。年齢は二十歳〜七十歳代と幅広く、職業も主婦や商店主、元教員、公務員、会社員などさまざまだが、皆、町を愛し、誇りに思う点で心は一つだ。

最近では、藍の豪商だった吉田家（藍商佐直）の住宅が修復され、当時の豪商の商いや生活を見学できる施設として、観光客らの注目を集めている。民芸店や茶屋、物産店なども次々に出店、かつての吉野川水運の船着き場を再現した公園もできた。

そして、これらの施設への表玄関として、道の駅「藍ランドうだつ」が昨年十二月にオープンした。これからも「うだつ」の景観形成に努め、交流による観光リゾートタウンを目指したいと思う。

都市との交流施設「美村が丘」オープン

私たちが掲げるまちづくりのもう一つの柱は、都市部の人たちとの交流による、新しい農業の展開である。その拠点が、標高五百メートルの中山間地、町内東大谷に造られたグリーン・ツーリズム

ムの交流促進宿泊施設「美村が丘」（第三セクター）だ。

ゆとりや安らぎ、農村での憩いを求める都市の人たちが増えている昨今、そば打ちやうどん打ち、かずら細工、竹細工、田植え、稲刈り、野菜作り、山菜採りなどを体験してもらい、心触れ合う交流によって農村地域の振興、活性化を図ろうというものである。周辺の自然を壊さずに整備した新しいスポーツ施設「マレット・ゴルフ場」も、この春に完成し、来訪客は、吉野川や四国山脈の展望を楽しみつつ、ゲームに親しんでいる。

脇町の観光スポット

「ふれあい館」江戸時代の旧家を改修して、藍染めの実演や、休憩施設として利用いただける、



吉田家



オデオン座（中央が山田洋次名誉館長）

うだつの町並みのくつろぎのスペース（入館無料）。

「あんみつ館」シンビジウム（洋蘭）のあんみつ姫にちなんで名付けられた展示・直売施設。咲き誇るシンビジウムの中で、美しい時間を過ごしてもらえ。シンビジウムは十一月〜三月。五月〜十月はコチヨウラン（胡蝶蘭）、デンファレを楽しんでもらえる（入館無料）。

「吉田家住宅（藍商佐直）」かつての藍の豪商の家屋を改修し、歴史的建造物として公開している。主屋の後ろには大きな蔵があり、奥の門の外には石垣があり、吉野川の水運を利用した船着き場となっていた（入場料大人五〇〇円・子供二五〇円）。

「脇町劇場・オデオン座」昭和九年に芝居小屋として建てられ、歌舞伎や浪曲などが催され、戦後は映画館になり、地域の憩いの場として親しま

れた。平成八年、松竹映画「虹をつかむ男」の舞台になり、文化的価値が見直され、町指定の文化財として修復。山田洋次監督が名誉館長を勤めている（入場料大人二〇〇円・子供一〇〇円）。



「昭和の町」オープンで元気・にぎわいを回復

——周辺の文化資源とリンクした真の観光都市を目指す



豊後高田市長

永松博文

大分県豊後高田市は、国東半島の付け根に位置する。平安時代を中心に華開いた六郷満山文化の中心地として、日本三阿弥陀堂の一つとされる国宝富貴寺大堂をはじめとする仏教文化遺産が数多く残ることから、「仏の里」として年間約八万人の観光客が訪れる。その「仏の里」に、「昭和の町」が新しく観光スポットとして加わろうとしている。

寂れ始めた商店街に危機感

この「昭和の町」は、当市の中心市街地を活用して、栄えたころの商店街のにぎわいを取り戻そうと、官民が一体となって考え出した構想である。当市の商店街は、江戸時代から明治、大正、そして昭和三十年代にかけて、国東半島をはじめ、周辺を代表する商業都市として栄えてきた。

ところが、モータリゼーションの普及や昭和四十年の宇佐参宮鉄道の廃止、さらには近年における郊外型の大型店の進出により、笑い話ながら、

「人よりも犬や猫の通りの方が多い」というほど、寂れ果てた商店街になっていた。後継者もなく、次第にシャッターの上がない店が増えるようになり、全く活気のない町に成り果ててしまった。

「このままではあと十年も経たないうちに商店街は無くなってしまふ。なんとかしなくては」と危機感を感じ、街並みの実態調査を行ったところ、なんと昭和三十年代以前に建てられた古い建物が七〇%以上残っており、そこに注目した。遠い昔のようで、ついこの前であった「昭和」という時代をクローズアップし、八商店街のうちの四商店街が参加して、当市が一番栄え、元気があった昭和三十年代の街並みにぎわいを取り戻そうとする取り組みがスタートした。

「昭和」の建物再生に着手

平成十三年度に国の中心市街地空き店舗対策事業、県の街並み景観統一整備事業を活用して、まず、昭和の建物再生ということで、高度経済成長

期に流行した軒先を覆い隠す看板建築（パラペツト）を取り外し、建物本来の姿を取り戻そうという取り組みを開始した。それに加えて、アルミ製の玄関戸を木製にしたり、看板を木製やブリキ製のものに架け替えたりと、ごく簡単な修景を行った。そして、昭和のお宝（けっして高価なものではなく、その店の歴史を物語るもの）や郵便ポストなどを展示して、雰囲気づくりを行い、また、その店ならではの商品開発に取り組み、七店舗がオープンするに至った。

その当時は、客が来訪しても、「どこが昭和なのか」と言った悪評を受けるなど、迷惑を掛けることが多々あった。そこで、「この街並み整備はまだまだ工事中で、皆様にはご迷惑をお掛けしています」という旨の看板を設置した。また、商工会議所職員、市職員、ボランティアが一体となって、町並みガイドとして、その店の歴史やお宝、自慢の品などを説明し、来客に少しでも満足してもらおうと、対応に苦慮した。

駄菓子屋の夢博物館オープン

平成十四年十月十二日に大きな転換期を迎えた。第一の要因は、昭和の店十店舗が新たに仲間入りしたことだ。これにより、点々と存在した昭和の店が連続性を持ち、昭和の町並みを少し表現することができた。第二の要因としては、日本有数のおもちゃコレクター小宮裕宣氏の十万点を超えるコレクションの中から、約五万点を展示する「駄菓子屋の夢博物館」のオープンである。

小宮氏については、「昭和」というテーマがう



昭和の町商店街（上）と昭和ロマン蔵内部

つすら見えてきた時から、商工会議所の有志が誘致に動き、何度も何度も説得を重ね、ついに小宮氏が豊後高田への進出を決断、中核施設となる博物館が同時に開館することができた。

売り込み活動が「奇跡を起こす」

博物館オープンに向けて、夏場に商店街・商工会議所・行政、まさに三位一体となって、福岡市を中心とする旅行エージェントや雑誌社、マスコミなどを訪問し、売り込み活動を実施した。その結果、オープン後には、少しずつマスコミの取材やバスツアーが入るようになり、徐々に福岡、北九州方面に「昭和の町」が知られてくるようになった。そして、それが少しずつ中央にも広がり、観光客に加えて、同じような問題を抱える全国の行政関係者やまちづくり団体からの視察の問合せも増えた。

初めは個人客が九割を占めていたが、観光バスの割合も増え、当初は年間三〜五万人の客数を目標にしていたのに対し、それをはるかに上回り、月平均一万人を超えるようになった。駐車場のキャパシティなどの問題も生じたが、これほどまでの展開は全く予想していなかったため、まさに「奇跡が起こった」と思っている。「これがあのかつての商店街か」と。

ダイハツミゼットが動く宣伝塔に

例年五月に「五月祭」という市民のお祭を実施しているが、それに合わせて昭和の狭い商店街で活躍したあの懐かしい「ダイハツミゼット」をレストアし、大阪のダイハツ工業本社から陸走しながら、豊後高田市をPRするという壮大なイベントを計画した。大阪を出発地に選定したのは、大分県自体の知名度が低い上に、まして豊後高田市などは無名なために、なんとか大きくPRしたいと考えた。

その矢先に、ある商工会議所の会員がプランを提案し、これは面白いと思い、市と商工会議所関係者などと実行委員会をつくり、急ピッチで作業を進めた。実質約一カ月という短い期間の中でダイハツ工業にも絶大な協力をいただき、五月十二日に熱烈な激励を受けて、本社を出発、約七百公里の道のりを走りながら、動く宣伝塔として、豊後高田市を目指した。

道中での故障というハプニングにもめげず、無事十七日に豊後高田市まで帰り着いた。十八日には昭和三十年代のミゼットを中心としたレトロカーを集め、当時のCMキャラクターである大村昆さんも講演会に引き続いてミゼットに乗り込み、昭和の町を盛大にパレードした。

大きな明るい声の聞こえる商店街へ

昭和の町については、まだまだ町並み景観の整備が始まったばかりで、中にはがっかりして帰る客もいる。今後ますますハード・ソフト面での充実を図るとともに、この町づくりの四つ目のコンセプトとして掲げている昭和の商人再生、いわゆる客との触れ合いを大切にする昭和の商人の心意気を取り戻し、大きな明るい声の聞こえる、にぎやかな商店街を取り戻すために、三位一体となつて取り組んでいく予定だ。

また、前述したように、テレビなどで全国放送されるようになって、**「豊後高田市」**の名前が依然あまり知られていないという実態がある。これまで**「仏の里ぶんどたかだ」**という名前が、それなりの知名度があるものと考えていたが、必ずしもそうでないことに気付いた。

現に最近の問い合わせの状況をみても、個人の客については、全く初めてという人がほとんどであり、アクセスの説明から始まる。これからは、「昭和の町」を起爆剤として、真の観光都市として認知されるよう、それぞれの観光資源とリンクするような取り組みを進め、当市の隅々まで活気あふれる、元気な町にしていきたいと考えている。

総務省の今年度の地域国際化推進施策

◆国際化推進の財政措置を充実

総務省は、地域の国際化を推進するため、地方公共団体を取り組む国際化推進施策に対して、所要の財政措置を行っており、平成十五年度においては、引き続きJETプログラムの拡充に努めるほか、自治体職員協交流事業の充実など、地方財政計画において千百二十億円を計上している。

◆国際交流の推進

【姉妹都市交流の増大】

わが国の姉妹都市提携は、近年まで大規模都市に多かったが、現在では小規模の市町村においても活発な交流が行われつつある。また、交流対象となる国としては、従来は米国や欧州の国が多かったが、最近では中国、韓国などのアジア諸国が多くなりつつある。

昭和三十年に始まった日本の姉妹都市提携は、平成五年十二月一日に千件を突破し、同十五年三月一日現在で、三十九都道府県および九百二十五市区町村が千四百七十五件の姉妹都市提携を締結している。

【語学指導を行う外国青年招致事業（JETプログラム）】

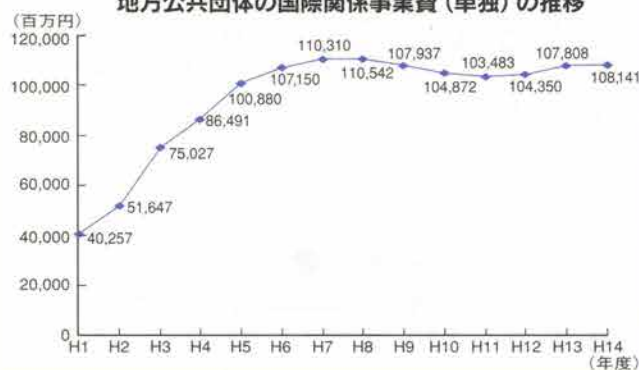
わが国における外国語教育の充実を図るとともに、地域レベルでの国際交流の進展を図ることを通じて、わが国と諸外国との相互理解の増進に資するため、総務省、文部科学省、外務省及び（財）自治体国際化協会（以下「協会」）の協力の下に、昭和六十二年から地方単独事業として語学指導などを行う外国青年の招致を行っている。

JETプログラムも十七年目を迎え、平成十五年度には四十カ国から六千二百二十六人を招致予定であるが、同十二年十月にJETプログラムの更なる充実のために、これまでの課題を検証し、現在の課題と今後の方向性を議論するため、「JET基本問題検討会」が設置された。当委員会は学識経験者と地方公共団体、総務省、外務省、文部科学省および協会の代表で構成され、同十三年九月まで一年間

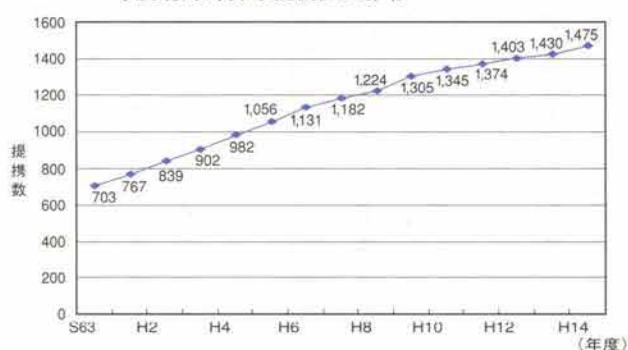
にわたり検討を行い、「JET基本問題検討会報告書」が取りまとめられた。

これらの提言を踏まえ、同十四年度より、二回まで認めていた契約回数（延長）を三回まで認め、「専任PA（カウンセリング担当者）」または「小学校教育専属ALT（外国語指導助手）」としての職務に従事することが可能となった。

地方公共団体の国際関係事業費（単独）の推移



年度別姉妹都市提携数の推移



「小学校専属ALT」は教育委員会、または教育事務所に配置され、管内の小学校を巡回し、外国語会話学習の補助など小学校における国際理解

また、翌十五年度からは、契約回数延長を四回まで認めることが可能になった。
「専任PA」は取りまとめ団体（都道府県、政令指定都市）に配置され、JET参加者へのカウンセリング業務、JET参加者の有効な活用方策に関する総合的な企画・立案業務、ALTの外国語指導業務に関する助言・指導など（訪問指導を含む）、その他所属長が必要と認める業務（ただし、学校において外国語授業の補助などとしての活用を行うことはできない）に従事する。十五年度は全国で十二人配置された。

姉妹都市提携数の相手国別割合（平成15年3月1日現在）

【都道府県】

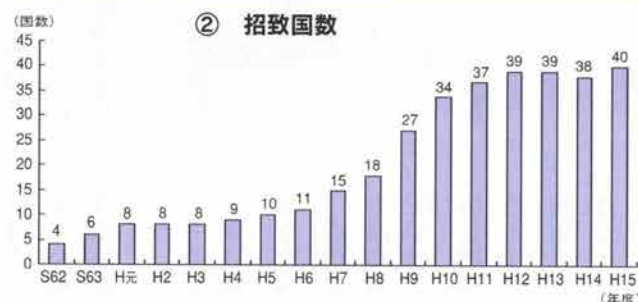
相手国名	提携数	割合
中国	34	29.1%
アメリカ合衆国	23	19.7%
ブラジル	11	9.4%
ロシア	7	6.0%
韓国	7	6.0%
フランス	6	5.1%
オーストラリア	6	5.1%
インドネシア	4	3.4%
ドイツ	3	2.6%
イタリア	5	4.3%
メキシコ	2	1.7%
スペイン	2	1.7%
パラオ	2	1.7%
その他	5	4.3%
合 計	117	100.0%

【市区町村】

相手国名	提携数	割合
アメリカ合衆国	413	30.4%
中国	256	18.9%
オーストラリア	99	7.3%
韓国	87	6.4%
ブラジル	48	3.5%
カナダ	69	5.1%
ロシア	33	2.4%
ドイツ	42	3.1%
フランス	41	3.0%
イタリア	26	1.9%
ニュージーランド	43	3.2%
オーストリア	32	2.4%
フィリピン	19	1.4%
オランダ	11	0.8%
その他	139	10.2%
合 計	1,358	100.0%

【国際交流に対応する人材を養成】
平成三年度から地域の国際化に対応できる地方

教育の補助業務に従事する。学習指導要領の改定によって小学校教育に総合的学習の時間が導入されたが、その際、国際理解教育が各小学校で重要視されている。小学校専属ALTは各小学校を巡回し、児童に簡単な英会話を教えることで英語に対する親しみを感じさせ、またゲームなどを通して母国の文化、生活、社会の紹介を行うことによって、児童の国際感覚を養うことに大きな役割を果たしており、その需要は非常に高まっている。総務省としても各地方公共団体の要望を踏まえ、十五年度においては全国で四十一人配置した。



公務員を養成するため、「地方公務員海外派遣プログラム」を創設し、地方公務員の海外派遣を支援しており、同十五年度は三人を派遣している。また、同六年度からはプログラムの参加対象に美術学芸研究員を含めることとし、十五年度は海外の公立美術館に一人を派遣している。
また、平成五年四月、主として市町村職員の国際化対応能力を向上するため、滋賀県大津市に全国市町村国際文化研修所（国際文化アカデミー）が開設された。研修内容及び期間の長短により区分されたいくつかのコースが開講され、自治体職員の国際化対応能力の向上を図るプログラムを実施している。

◆ 国際協力の推進

「地域レベルの国際協力を推進」

近年の「国際交流から国際協力へ」という、新たな潮流を背景とする地方公共団体を中心とした国際協力の取り組みの重要性にかんがみ、同七年四月に「自治体国際協力推進大綱の策定に関する指針」を示し、各都道府県・政令指定都市に大綱を策定するよう依頼した。

翌八年度より地方公共団体が海外の地方自治体などの職員を受け入れる場合に総務省や協会が支援する「自治体職員協力交流事業」、および地方公共団体が実施する先駆的国際協力事業を協会が同省と協力して「モデル事業」に認定し、積極的に支援する「自治体国際協力促進事業」を創設し、地域レベルの国際協力事業を推進することとした。

平成十一年度から国際協力人材バンクの登録者を活用して、地方公共団体の職員などを自治体国際協力専門家として外国の地方自治体などに派遣する「自治体国際協力専門家派遣事業」を創設し、地方公共団体の国際協力の中心となる人づくりへの協力を支援することとした。同十五年度は十人の派遣（中国ほか）を見込んでいる。

「市民国際プラザ」設立

地方公共団体がNGOとの連携により、特色を活かした多様な国際協力の取り組みを



一層促進するため、同十一年七月に協会に「市民国際プラザ」を設立し、国際協力に関する情報の収集・ストック・提供、国際協力の案件形成に対する支援などを行っている。

「外国教育施設日本語指導教員派遣事業（REX計画）」

海外における日本語教育に対する協力要請に、わが国の教員を外国の中等教育施設へ派遣し、日本語教育に従事させるとともに、教育・文化交流活動を通じて教員の指導能力の向上および国際性の養成を図るため、外国教育施設日本語指導教員派遣事業（REX計画）を文部科学省とともに実施しており、同十五年度は十八人を派遣予定である。

◆ 「世界に開かれたまち」大臣表彰

地域の総合的な経営主体である地方公共団体は、国際化の進展に対応して環境を整備し、国際化を計画的に推進して世界に開かれた地域社会を形成していく必要がある。また、従来の国家間の国際協力ばかりでなく、地域に密着し生活に根差した分野での国際的な協力も求められている。

このような状況を踏まえ、「地域の国際化」に総合的、先進的な取り組みを行っている団体の功績をたたえ、広く全国に周知することを目的として、平成六年度から大臣表彰を実施している。同十四年度は五団体（地方公共団体一団体、民間団体四団体）に表彰を行った。

◆ 留学生対策の推進

平成八年度から新たに「ひとづくり」への支援

の一環として、地域における国際理解の推進に重要な役割を果たすとともに、帰国後は地域の良き理解者として地域間の国際交流の架け橋となっている留学生への支援を推進している。

◆ WTO協定等国際協定への対応

ウルグアイ・ラウンド交渉の成果として、平成七年にWTO（世界貿易機関）が設立されて以来、地方公共団体と関係のある国際協定（政府調達協定、補助金協定、スタンダード協定、サービス協定など）が増加しており、特に近年は、地方公共団体の個別具体の調達案件について外国政府から要望や質問が寄せられるなど、地方公共団体の施策に対する諸外国の注目が高まってきている。

また、同十三年十一月にカタールで開催されたWTO第四回閣僚会議において、新ラウンド交渉の開始が合意され、同十四年一月から農業、サービス、政府調達などの広範な分野に関し、新ラウンドの交渉期限である同十七年一月一日に向けて交渉が本格化しており、今後、地方公共団体に対し、少なからぬ影響が及ぶことも予想される。

このような状況を踏まえ、総務省としては、既存の国際協定の運用に資する助言や情報提供などを行うとともに、WTO新ラウンド交渉などの国際協定締結交渉における地方公共団体への協定適用のあり方について、地方公共団体における地域振興施策を勘案しつつ適切に対応していくなど、地方公共団体の理解と協力を得ながら、国際協定に対する取り組みを強化していくこととしている。



(財)広島市ひと・まち
ネットワーク
まちづくり市民交流プラザ

主事 為政久雄

「ふむふむ」と 共感広がる まちづくり基金

—ひと・まち広島未来づくりファンドHm²

「ドゥワーン」。タイムキーパー
が大きな銅鑼の音を響かせると、百
人以上が見守る会場内に和やかな笑
いが起こった。

申請団体によるプレゼンテーショ
ンの制限時間は三分間。「発表は熱
がこもるから、終了の合図には銅鑼
を鳴らそう」。運営ボランティアを
務める学生たちから奇抜なアイデア
が次々に飛び出し、それが審査会の
雰囲気をもたらし、それが審査会の

広島市まちづくり市民交流プラザで
六月二十八日、「公益信託広島市まち
づくり活動支援基金(愛称「ひと・
まち広島未来づくりファンドHm²」)

助成事業の初めての公開審査会が行
われた。

自ら支え育む基金を目指す

この基金は、市民の自主的なまちづ
くり活動を助成する目的で、平成十五
年三月に公益信託として設立された。

平成元年から十年間、ふるさと創
生基金を運用し実施してきた「広島
市まちおこし海外派遣事業基金」
(平成十四年度に廃止)の約一億円
を原資に、財団法人広島市ひと・ま
ちネットワークが広島銀行に委託
し、設立した。

基金の設置形態を公益信託にした



のは、この基
金の運営にお
いて、市民、企
業など地域を
構成する全て
が自分たちの
住む地域を良
くするために、
参画できる仕
組みとする狙
いがあった。

一方、昨今の厳しい経済情勢の中、
運用益では事業の継続が困難なた
め、寄付を募るとともに元本を取り
崩せるようにした。行政は種基金の
拠出にとどめ、市民、企業などから
幅広く支えてもらえるよう、寄付を
呼び掛ける積極的な広報活動を展開
している。ちなみに、六月末までに
六十六件、五百六十万円を超える寄
付が寄せられた。

十七団体に 三百二十八万円を助成

基金は、助成事業とともに、もう
一つの狙いがあった。公開型審査会
や活動報告会を実施し、その成果を
市民に還元することで、活動ノウハ
ウの共有化、団体同士の交流・ネッ
トワーク化、助言・支援などによる

活動の質的向上などが促進される。
さらに、地域社会全体が自主的な
市民の取り組みを知る機会の提供に
つながれば、市民の関心や参加の広
がりも期待できる。市民ファンドの
仕組みは、市民社会の構築の第一歩
として、非常に重要な役割を果たす
と思われる。

今回初めてとなる助成事業には、
五十二団体(団体育成助成部門十七
件、まちづくり活動発展助成部門三
十五件)からの応募があり、このう
ち発展部門の二十団体が公開審査会
に臨んだ(育成部門は書類選考のみ)。
審査会をスムーズに運ぶため、学
生や社会人、行政職員など二十人が
ボランティアスタッフとして、会場
運営、司会進行、交流会など、手づ
くりで会場の雰囲気を盛り上げた。

結果は、十七団体に総額三百二十
八万六千三百円が助成された。運営
委員の講評のあと、これまた学生の
アイデアによる手づくりバッジで表
彰する、セレモニーが行われた。今
後は、中間・最終活動発表会で、活動
の進捗状況が報告される予定である。
銅鑼の音の余韻のように、「ふむ
ふむ」で育った活動が、まち全体に
広がることを期待したい。

「日本一小さな集落のHP」から情報発信

NHKの朝の連続テレビ「さくら」の舞台になったことで有名な岐阜県古川町。町の中心部には、コイの泳ぐ瀬戸川を挟んで出格子の商家、白壁土蔵の造り酒屋が立ち並び、明治・大正時代の面影が残る美しい街並みが保存・整備されている。

その町の中心部から車で十五分は



「笹ヶ洞」地区

ど行くと、緑豊かな山あいなのかな田園風景が広がる。今回訪れた「恵比須の郷」は、この中山間にある集落の一つ、「笹ヶ洞」という地区にある。笹ヶ洞は、世帯数三十二戸、人口百二十人の典型的な農村集落だ。ちなみに、団体の名称は、地区にある恵比須神社に由来している。

恵比須の郷は、平成十三年六月に笹ヶ洞地区の有志九人で立ち上げた。その中心となって活動している山本哲夫さんをはじめ、地区の人に話を伺った。

集落版デジタルアーカイブ

恵比須の郷の活動は、主に地区の伝統文化・歴史などを収集・記録し、その情報を発信することである。情報発信の手段として、同年七月に地区の公式ホームページ「恵比須の郷」を開設した。地域づくりを目的

とした「日本で一番小さな集落のホームページ」と自負している。

近年、地域固有の文化をデジタル化する方法で保存、活用するデジタルアーカイブ事業に取り組む自治体が増えている。

その背景として、当然マルチメディア技術の進歩があるが、そこには、先人が長年培ってきた地域の伝統文化や歴史、あるいは自然という

団体プロフィール

設立年●平成13年8月

代表者●山本哲夫

設立・運営主体●自主的組織

会員数●9人

<事務局連絡先>

〒509-4274 岐阜県吉城郡古川町笹ヶ洞741

(電話) 0577-75-2186

(E-mail) ebisunosato@yahoo.co.jp

(URL) <http://www6.plala.or.jp/ebisunosato/>

「財産」を、次世代に継承していくことが、現代に暮らす者の重要な役割、使命であるとの考え方がある。恵比須の郷の原点もまさにそこにある。そもそも恵比須の郷が発足した契機は、昭和六十年に地区住民が自ら編集・発行した笹ヶ洞地区の沿革誌「恵比須の郷」であった。山本さんのほか四十歳から五十歳代の主要メンバーの父親世代が編集に携わった沿革誌には、地区の歴史や史跡、文化財などが丹念に調査され、二百五十ページにわたり詳細に記録され、この小さな地区でこれほどの資

料が収録されたことに驚かされる。発行から十五年が経過、編集に携わった住民も高齢化し、徐々に人々の記憶から忘れ去られようとしていた時、「先人が残した財産を何らかの形で残していきたい」と考えた「次世代」の山本さんは、地区の有志に呼び掛け、地区の人の賛同を得て、沿革誌「恵比須の郷」を基にしたデータベ

ース整備に取り掛かった。資料を収集していくうちに、今まで知らなかった地域の魅力を再発見することが多かった。逆に

「昔はよく見かけた生き物も、いざ写真に収めようと撮りに行くと、どこにもいなかった」こともあり、それまで気付かなかった自然環境の変化を実感させられた。その意味で、「デジタル化しておけば、今の笹ヶ洞地区の姿を子どもたちに残していく」ことができ、その意義も大きいという。

多彩な人材集まり活動を支える

恵比須の郷のメンバーは、専業農家、高校の元教師、元県職員、木工業、イーターン者など、さまざまな人

で構成されている。中でも専業農家の阪口誠一さんは、山本さんの良き理解者であり、兼業農家が多いこの地区でも農作業では頼れる存在だ。



阪口さん(左)と山本さん

を言える雰囲気があり、以前から先進的な考えを持っている住民が多かったからだ」という。恵比須の郷を立ち上げるに当たっても、「まずはやってみよう」と何でも新しいことにチャレンジする行動力と、またそれを受け入れる寛容さの良い伝統が、原動力になってきたようだ。

田舎暮らし通じ 都市住民と交流

恵比須の郷が、デジタルアーカイブと同時に力を入れているのが、「田舎暮らしのすすめ」だ。笹ヶ洞には現在、東京などからイターンで四世帯が移住している。恵比須の郷のメンバーの一人であり、イターンの受け入れ窓口を買って出ている専業農家の向林さんは、「ここは田舎だけど、何も不便なことはない。お金には換えられない温かい人情味が残っている」と誇らしげに語る。ホームページが開設されてからは、イターンに興味がある人からの連絡も増え、何度か案内をしたという。そのほか、地区を挙げてのイベントとして、町内の子どもたちを集め、ベテランのお年寄りに教わりながら

さらに、地区にはさまざまなその道の達人がおり、ホームページ内でも「この道名人」として、クマ撃ち名人や山菜採り名人、きこり名人などが紹介されている。

イターン者や昭和六十年に沿革誌を発刊した人も含め、この小さな地区に多彩な人材が集まっているのは、「転入者も若い者も堂々と意見

行い田植え体験、都市住民を集めての山菜採りツアーなど、農業体験を通じた世代交流や都市住民との交流にも取り組んでいる。秋には稲刈り体験を予定している。さらに今後は、受け入れ体制を整えて、子どもの体験学習や都市住民との交流の場として、グリーンツーリズムにも力を入れていきたいという。

豊富な素材、 広げるネットワーク



町内の子どもたちによる田植え体験

ページには、既になりに多くの地域情報が掲載されており、これ以上素材はないのではないかとも思えるが、「見過ごしているだけで、探せばまだまだたくさんあります。皆さんの地域にもきっとありますよ」と山本さんは事もなげに言う。

また、ホームページを開設してからは、自治体職員や雑誌の編集者、田舎暮らしに興味を持つ人、さらには飛騨地方や古川町出身者などから反響があり、最近では、同様の取り組みを行っている全国の団体や個人的に興味を持つ人とも交流するようになるなど、ネットワークの輪が着実に広がっている。

社会生活のもっとも基礎的な最小単位である集落で、やる気があればここまでできるお手本を示してくれているような気がする。過疎化が進み、市町村合併が進展する中で、このような集落がいかに自立し、個性を出していくか。恵比須の郷はそんな大きな課題に挑んでいるように思える。

恵比須の郷の取り組みは、まだ始まったばかりである。地区のインターネット接続世帯がまだ半分程度のこともあり、地区全体に理解してもらうにはもう少し時間がかかるようだ。しかし、地区の集会で活動状況を報告し、ホームページに寄せられた意見などを紹介するに従い、住民にも徐々に認知されつつある。それにしても恵比須の郷のホーム

Iターン者との交流から「サーファーム」誕生

「種子島ジュントス」(以下、ジュントス)は種子島の島おこしを目指して、平成十二年十一月に結成され、翌年六月にNPO法人格を取得した団体である。島おこし活動の中でもサーフィンを目的に、種子島にIターンしてきた若者との交流から「サーファーム」誕生に至った経緯を中心に、ジュントスの事務局がある「おじやり申せ(いらっしやいませの意味)館」を訪ね、理事長の有馬寛治さんと館長の種子島秀洲さんに

お話を伺った。

元気な種子島目指し
活動展開

種子島全体の人口は三万六千人弱、最も多かった四十年前に比べると半減、高齢化率は二七%と過疎・高齢化が進んでいる。そこで、Iターン・Uターンの推進は、重要なテーマとなっている。種子島さんも二年前に島おこし活動に参加するため、東京からUターンしてきた。

ジュントスの母体は、平成元年から活動していた一五会である。この会は、種子島の過疎・高齢化という流れの中、今後の地域づくりについて話し合うための、商工業や農業の枠を超えた異業種間の交流会である。一五会は現在も活動を続けているが、具

体的な地域づくり行動を起こすために、ジュントスを立ち上げた。

ジュントスとは、ポルトガル語で「みんなで一諸に」という意味である。鉄砲伝来をきっかけにポルトガ



サーファーム商品

ルとは交流があり、ごく自然にポルトガル語を使うことになった。とにかく楽しくわいわいやるうという意味合いが込められている。会員の年齢層は三十代から六十代まで、ほとんどが男性である。また、職業はガソリンスタンド経営や歯科医、菓子屋などの自営業が圧倒的に多い。毎月第一、第三水曜日に例会を開

催し、会員同士で「今度はどういうことをやってみよう」と、自由な雰囲気アイデアを出しあって活動方法を決めている。種子島を少しでも元気のある島にしようと、「サーファーム」事業以外にも、地域通貨「どんが」事業、体験観光の受け入れ事業、Iターン・Uターン者への情報提供、災害復旧のためのチャリティーフリーマーケット開催などの

活動を実施している。

サーファームと地元住民との
交流が奏功

種子島は、鉄砲伝来と種子島宇宙センターで有名だが、サーフィンのメッカとしても知られている。南北に約五十七キロ、東西は約五十キロと縦に細長く、全体的に平坦な地形のため、西風が東風のどちらかが吹けば、波が発生しサーフィンができる。サーファームにとっては、とても魅力的な島だ。そのため、サーフィンを目的に種子島にIターンしている人が多い。実際にサーフィンを目的にIターンした人は西之表市だけでも百人以上いるといわれている。彼らは、農家の空き家に数人で住んだり、安い給料のアルバイトで働いたり、苦労しながらも移住してきた。

そこで、Iターンをより推進するために、Iターン者が何を考え、また何を求めているのかを知ろうと二年前、Iターン者と地元住民との懇親会をジュントスが主催した。Iターン者のほとんどは、サーフィンを目的に移住してきた人で、年齢層は二十代から四十代の若い世代であった。懇親会では、サーファームたちが地元住民との交流を求めているもの



お話を伺った理事長の有馬寛治さん(左)と館長の種子島秀洲さん

団体プロフィール

設立年●平成12年11月

代表者●有馬寛治

設立・運営主体●自主的組織

会員数●92人

<事務局連絡先>

〒891-3111 鹿児島県西之表市西町11番地

(電話) 0997-22-2828

の、実際には、なかなかそのきっかけがないことが明らかになった。

そこで、地元住民との交流を進めるために、ジュントスが主体となつて、まず地元の女性でつくる郷土料理グループ「おっかんの里」と、サーファーたちの郷土料理教室を開催した。郷土料理は島外から来たサーファーたちに変好評だった。そして、次はおっかんの里のメンバーにサーファーたちがボディボードを教えて、波乗りの楽しさを味わってもらった。このような交流活動が続き、サーファーたちと地元住民との親睦が徐々に深まっていた。

初経験で「サーファー米」が誕生

サーファー米を作るきっかけは、地域おこしの専門家である江戸川大学の鈴木輝隆先生の提案であった。西之表市のふるさとアドバイザー会議のメンバーとして、たびたび種子島を訪れていた鈴木先生は、ジュントスとも、地域通貨導入の勉強会で知り合っていた。そして、サーファーと地元住民との交流活動を見て、「若い力を地域おこしに活かせないか。例えば、サーファーたちの力を借りて米を作ってみたらどうか」と提案。ジュントスもサーファーたち

も「それは面白そうだ」と、すぐに行動を起こした。

そして、農業を使わない、やさしい米づくりを目標に、昨年春に初めて取り組みを開始。休耕田十五アールを提供してもらい、ジュントスとサーファーたちで田おこしから始め、四月の田植えにはサーファー四十人が参加した。



田植え

サーファーのほとんどが米作りは初めてで、戸惑いもあったが、農業者の指導の下、手で田植えを行った。その後、稲が育つとともに除草作業を行ったが、無農薬のため、一番心配なのは、虫と病気であった。しかし、順調に育って七月下旬の刈り入れ時期を無事迎えた。

初年の収穫量は三百五十キロ。包装紙のデザインは、ロケットを模したもので、「種子島サーファー米」として島内のお土産屋を中心に販売した。販売価格は普通のコシヒカリより割高だったが、八月中旬に発売開始後、九月末には完売し、事業として大成功を収めた。

この成功を受けて、今年は作付面積を倍に増やし、収穫増を目指している。現在、刈り入れ時期だが、サーファー仲間の口コミもあって、すでに遠く大阪や福岡から注文がある。今後は、さらなる収穫増や、「サーファー芋」にも挑戦してみようというアイデアも出ている。これをきっかけに、新空港の幹線道路をハイビスカスで飾る植樹ボランティアに、ジュントスが一声かけるだけでサーファーたちが加するなど、お互いの絆はさらに深まっている。

地域通貨と体験観光受け入れ事業に挑戦

短期間でこれだけの活動が出来たことについて、種子島さんは「最初から百パーセントは目指さない、六十パーセントぐらいでも実験的にやってみる。駄目だったら止めればいい」と語った。とにかく、失敗した時のことを深く考えるより、まずは行動してみようというところだろう。

今後もジュントスは、若者とお年寄りが共生し、安心して楽しく暮らせる種子島の島おこしのため、活動を続け、特に地域通貨「どんが」事業と体験観光受け入れ事業に力を入れていこうとしている。

地域通貨「どんが」は、島内だけで通用する紙幣型で、コミュニケーションづくりの相互扶助サービスを推進するため、また「もの」との交換により地産地消で島の経済を活性化させる目的から、昨年四月に取り組みが始まった。しかし、現在の利用者は約百人にとどまり、まだ十分理解されるには至っていない。そこで、地域通貨を流通・循環させることで、どういうメリットがあるかを知ってもらうため、イベントを開催し普及に努めようとしている。

また、体験観光受け入れ事業は地元の人との交流が重要である。昔から種子島は、人情に厚く、島外から来た人を暖かく迎える風土がある。イターン者であるサーファーたちを温かく迎え入れたジュントスと種子島の人たち、何年後かに種子島を訪れたら、きっと、また新しい島おこし活動に取り組んでいることだろう。

(財)地域活性化センターコンサルタント業務課

副参事 ● 杉中寛之

地域 だより

港町三市で 「すし街道」形成

宮城県

宮城県は、港町に多くのすし店が集まる塩釜、石巻、気仙沼の三市と連携し、「すし」をテーマとした観光客誘致に力を入れる。JR東日本仙台支社や商工会議所などと「みやぎ寿司街道推進協議会」を設立、広域観光キャンペーンを七月下旬からスタートさせた。

PR方法は、同協議会の選定委員が三市のすし店を現地調査し、お薦め店を選定して冊子で紹介する。すし飯に使用されるコメのササニシキは宮城県が発祥の地。気仙沼港は

カツオ、塩釜港は生マグロで全国一の水揚げ高を誇ることから、県観光課は「三市はすし街道にふさわしい下地が十分ある」と話している。

ミュージアム都市づくり計画を策定

茨城県つくば市

つくば市は、市内にある研究機関や商業施設と自然を活用した都市づくりを行うため、「ミュージアム都市づくり」の基本計画を策定した。同市には国などの教育・研究機関や、民間の研究施設が数多くあり、それらとつくば市の自然や歴史的施設を組み合わせ、地元業者などの協力を得て、まちづくりを進める。計画によると、同市を訪れた人にリピーターとなつてもらい、各研究機関の協力を得て、遊びながらさまざまな科学知識を学んでもらうイベントなどを実施する。さらに、①筑波山や地域農産物をブランド化して産業振興につなげる②地元農産物を活用した農

業の振興③各研究機関への誘客④自然の山並みと街並みの景観と、古くからの芸術・文化の伝承を通じまちの活性化につなげる——ことを目指す。

まちづくりで市民研究機構設立

金沢市

金沢市は、市民が地域の実情に合った個性豊かな施策の研究に取り組む「まちづくり市民研究機構」を設立した。市役所分室の一角を研究室に提供し、九月から研究活動に入れるようにする。研究成果は可能なものから市の施策に反映していく方針。

同機構は、学識経験者九人をディレクターとし、各ディレクターが「まちなか再生」「情報化」「環境問題」などの基本テーマを提案した上で、市民研究員を指導する。七月に募集した研究員の研究期間は原則一年間。市では、同機構の活動を通じ「市民と行政が協働して物事を進めるあり方を考えたい」としている。

お笑いまちづくり実行委を発足

岐阜市

岐阜市は、笑いにより活力ある都市を再生しようと「お笑い感動のまちづくり実行委員会」を発足させた。笑いで免疫力を担うNK細胞を活性化させ、人とまちを元気にし、観光や教育文化振興につなげるのが狙い。

実行委は、細江茂光市長が名誉会長を、落語家の桂三枝さんが顧問を務め、勉強会やイベントなどを企画して実施。市民を明るく元気にさせ、日本一元気な県都を目指す。

笑いによるまちづくりは、「落語の祖」とされる安楽庵策伝和尚が同市に生まれたことから考案された。一五五四年に生まれた和尚は、同市三輪の浄音寺住職を務める傍ら、落語の基となった説話集「醒醉笑」を執筆し、字の読めない人にも話の「落ち」で仏道を面白おかしく説いたとされる。

水と緑・歴史と文化のまちづくり条例

愛知県岡崎市

岡崎市は、市民の声をまちづくりに活かしながら都市環境の整備・保全を図るため、「水と緑・歴史と文化のまちづくり条例」を制定し、十月から施行する。

中核市移行で、開発許可などの権限が県から移譲されたことなどを受け、「水と緑」「歴史と文化」のまちを市民、事業者とともに守り育てるのが狙い。条例は、市民参加の仕組みとして、地域住民の団体を対象にした「まちづくり協議会」を組織するほか、「まちづくり協働推進市民」を募り、環境などについて研修を行い、まちづくりのリーダー役を育成する。

環境保全の方法としては、市が位置付ける「景観環境保全地区」、地域住民の発意による「まちづくり協定地区」、地区設定より小さな範囲の「景観環境資産」を定める。

アンテナショップめぐり

福島

福島県ふるさとコーナー

ふくしまふるさとコーナーは、上野公園不忍池南の不忍通に面する、ふくしま会館一階にあります。福島県は浜通り、中通り、会津と三方部に分れており、各地の産品を展示・販売しています。

主な販売品は、喜多方ラーメン、凍りもち、凍り豆腐など食品や、県内各地の地酒類、民芸品、会津張り子赤べこ、三春駒、会津漆器、からむし織などを展示販売。特に東京では、このコーナーでしか買えない、幻の酒「花泉」が人気の一品です。

また、福島県は果物王国で、あかつき桃、梨、みしらず柿、りんごと、会津産新米の産地直送・販売も行っており、お客様に大変好評です。

地下一階には、郷土料理と県内の地酒が楽しめるレストランがあり、福島県出身者や会社帰りのサラリー

マンなどでにぎわっています。ふるさとコーナーには県内観光地、観光施設、温泉など、福島県内の情報がパンフレットなどで収集できます。

ぜひ一度、ふくしま会館へおいでください。お待ちしております。



売れ筋
Best5

- ①喜多方せんべい
- ②喜多方ラーメン
- ③福島銘酒
- ④会津赤べこ
- ⑤凍り豆腐



Data

開設年＝平成3年6月
事業主体＝福島県庁消費組合
店舗面積＝55㎡
従業員数＝1人
年間売上＝約1,000万円
所在地＝台東区上野2丁目12-14
電話＝03(3834)6221
FAX＝03(3834)6216
営業時間＝9時～19時
(年末年始、月曜日休)

山梨

山梨県東京物産観光センター

山梨県東京物産観光センターは、山梨の観光情報・物産の展示即売・交流イベントの開催・就職情報などを満載した、山梨のことならなんでもわかる総合情報館です。

当センターは、昨年四月一日に港区南麻布の現在地に、東京八重洲の国際観光会館から移転し、営業してまいりました。移転以来、「あなたの暮らしをナチュラルに」をテーマにドライフラワー展示即売会や押し花作品展など、毎月山梨の伝統工芸・産業・クラフト・文化などの催事を開催してまいりました。

また、富士山、富士五湖、八ヶ岳、温泉、ワイン、ブドウなど山梨の観光や物産のご案内を

しております。さらに、ワイン、ジュエリー、和紙、織物ニット、オーガニックコットン、甲州印伝、すずり、印章、木工製品などを展示販売しております。

なお、昨年実施しました小学生を対象とした紙すき体験や、積み木を使って造形の夢を広げるイベントな

どの催事は、好評をいただきましたので、今後も職員一同、皆様に喜ばれる企画展を開催して参りますので、ご



来所いただけますよう、心からお待ち申し上げます。



8月の
催事案内

- 8月29日～30日
ぶどう直売会
- 8月20日～25日
ワイン試飲・即売会

Data

開設年＝昭和62年4月1日
事業主体＝山梨県観光物産連盟
店舗面積＝114㎡
従業員数＝5人
所在地＝港区南麻布3-6-5
電話＝03(3444)2567
FAX＝03(3444)2549
営業時間＝9時～18時
(月曜・祝翌日定休)
駐車場＝8台
HP＝<http://yamanashi.visitors-net.ne.jp/tokyo/>

センター通信

平成十四年度収支決算案などを承認

○(財)地域活性化センターの第七十回理事会と第四十六回評議員会が、六月二十三日に全国都市会館で開催され、平成十四年度事業報告案、同収支決算案および平成十五年度収支予算の補正案などが審議された結果、議案については全て原案通り承認された。

○決算額は、収入が十四億三千八百八十九万九千五百五十二円、支出が十億八千七百七十五万五千七百七十九円で、次期繰り越しが三億二千六百七十三万八千三百七十三円。また、基本財産は、民間会員入会により百万円増の二十四億二千三百十四万円。

○事業報告については、機関誌「地域づくり」をはじめとする各種情報誌および事例集を発刊したほか、インターネットによる地域情報の提供、全国地域リーダー養成塾の運



営、地域づくり計画の受託など、従前から行っている事業の充実を図った。

○平成十四年度収支決算に基づき、平成十五年度収支予算を補正し、補正後の予算額は、十五億二千八十四万三千円。

○その他、評議員の定数を二十人から三十人(現行二十五人から三十五人)とする寄付行為の変更、役員の退任などに伴う参与、理事、評議員の選任、組織規程の改正、役員等給与規程の改正、職員給与規程の改正が承認された。

笑顔がいちばん!

放送予定

●8月3日

山梨県南アルプス市・小菅村

伝統の味 手打ちの技継承で村おこし 多摩川源流を活かしたむらづくりへの挑戦

●8月10日

新潟県奥阿賀地域

体験による人と人との交流 体験教育旅行の郷土の偉人を活かしたまちづくり

●8月17日

三重県鳥羽市・阿山町

都会から来た農業後継者郷土の偉人を活かしたまちづくり

●8月24日

鳥取県境港市・三朝町

歴史・文化による町づくり 漫画による町づくり

●8月31日

愛知県蒲郡市・西枇杷島町 歴史をつむぐ人々

お知らせ

平成15年度 地域産品・観光おこし研修会のご案内 — 地域資源開発活用セミナー —

「地域の特色を活かした産品を作りたい」「産品が売れなくて困っている」「観光地として生き残るためには…」
などのお悩みをお持ちの皆様 !!

(財)地域活性化センターは、(社)日本観光協会との共催により「地域産品・観光おこし研修会」を開催します。

この研修会は、地域の人々が自らの地域の資源や特性を把握し、新たな特産品開発や魅力ある観光地づくりを進めていくための着眼点や手法を、講演やグループ演習などを通じて習得していただくことを目的としています。

各地で物産・観光振興に携わっておられる皆様、奮ってご参加ください。

開催地	石川県金沢市	香川県高松市
日程	10月16日(木)～17日(金)	11月13日(木)～14日(金)
研修内容	講演、産品アドバイス会、グループ演習	
講師	小林 英俊 氏(財団法人日本交通公社) 須川 一幸 氏(株式会社地域振興研究所)	前田 豪 氏(株式会社リージョナルプランニング) 須川 一幸 氏(株式会社地域振興研究所)
募集人数	各会場100名(先着順)	
参加費	お一人様 7,000円(研修費及び交流会費;消費税込)	
申込期限	9月5日(金)	10月3日(金)

※研修会の詳細は、ホームページをご覧ください。 <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp>

■お問い合わせ先 (財)地域活性化センター 振興部 業務第1課 高柳
業務第2課 小林

〒103-0027 東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階
(電話) 03-5202-6136 (FAX) 03-5202-0755
E-mail: takayanagi@chiiki-dukuri-hyakka.or.jp

「綿毛がこんなに舞っている」と伽椰子は声をあげた。湖水の上をタンポポの綿毛が微風に乗って流れている。少女は腕をのばして綿毛をとらえようとした。

(李恢成「伽椰子のために」より)

静かなる息吹の物語

北海道には
雄大な物語がある

HOKKAIDO

北海道観光振興局・北海道観光プロモーション協議会

手前みそ
ですが！

鹿児島県

住用村

56



黒潮の森 マングローブパーク

十六 世紀のころ
ヨーロッパ
人が「サンタマリア島」
と名付けたと言う美しい
島、「奄美大島」。その奄
美大島の中南部に位置
し、水とマングローブの
郷で知られる住用村のシ
ンボルと言えば、何とい
っても「黒潮の森マング
ローブパーク」です。

奄美大島群
島国定公園特別保護地区のマングローブ原生林と、リュウキュウアユを育む貴重な地域自然を活用した、自然回帰型の公園施設です。

マングローブ館では、リュウキュウアユと国定公園マングローブを通して、貴重な自然・川・生物を理解する生きた博物空間をつくり、展示物ジオラマ水槽、シアターなどで紹介しています。またカヌーでマングローブ原生林を探検することができ、大自然に生まれた、世界的にも珍しい動植物などを見ることができ、アマゾン気分を満喫することができます。

自然を基本とした、黒潮の森マングローブを訪ね、「龍宮の海で生命たちに出逢い、太古の森の息遣いを聴き、人々は神に祈り歌い踊る」奥深い島、奄美大島の魅力に触れる旅をしてみませんか。



6月

(実施)

★ふるさと情報プラザ

●6月2日～5日

高知県

夏を体感! 高知県西南地域の観光展 (1)

●6月9日～13日

山形県米沢市

特産品展示販売

●6月16日～19日

徳島県

藍と阿波踊りを体感する夏の旅行



●6月20日

奈良県大和郡山市

金魚すくい (2)

●6月23日～27日

長崎県

長崎のアウトドア体験

●6月27日

鳥取県倉吉市

鳥取倉吉すいか寄席

★日本橋プラザビルイベントスペース

●6月2日～3日

川井村 (岩手県)

岩手県川井村物産展 (3)

●6月9日～11日

山口県

おいでませ山口館一周年記念観光物産展 (4)

●6月27日

石川県

能登空港開港記念石川フェア



8月

(予定)

★ふるさと情報プラザ

●8月21日～22日

四国の秋の味と観光PR展

★日本橋プラザビル
イベントスペース

●8月5日～6日

福岡県北東部地方拠点都市
地域整備推進協議会

●8月20日～21日

掛川市 (静岡県)

●8月25日～26日

鶴岡市 (山形県)

【編集後記】

▼「昭和三十年代」を再現した商店街が各地に相次いで出現している。昭和三十年代は、日本経済が高度成長期に入り、国民生活が急速に豊かになった時代である。郊外に団地が建ち並び、家電製品が普及し始め、街にはスーパーが進出した時代であった。

▼それまでの日本の街が姿を消し、現在の街へと景観を急速に変えていった。昭和三十年代を少年期以降過ごした人にとっては、再現された三十年代の街並みに「懐かしさ」を感じさせると同時に、欧米化される前の「原日本の生活」を思い出させてくれる。

▼企業を定年退職した人などが生まれ故郷に帰ってみても、あまりに変わりすぎてしまい「帰る故郷がなくなった」などと嘆く声をよく耳にする。そうした人たちが昭和三十年代の街に強い関心を示すのは、郷愁感からだと言える。各地に出現した三十年代の街並みは、「モノ」を求めてにぎわった「ひと昔前の日本」の再現でもある。

(沢)

【6月号予告】

特集Ⅱ 大学と地域振興

地域づくり8月号

平成15年8月1日発行 編集・発行財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131 (代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>

印刷・製本／株式会社丸井文工社

夢にまっすぐ。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ



財団
法人

日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、
法律で禁止されています。